水辰會雜誌

第四高等學校校友會

第貳拾七號

明治三十三年七月三十日發行

（非賣品）

北辰會雜誌第二十七號目次

論說

ビショップ バルクレー　茨木清次郎

耕地改良論　B、Y、生

史傳

史海指鍼《續》　浦井恒堂

雜錄

印度佛教史に於ける聖龍樹　C、T、生

厭世雜觀《承前》　璞　哉

加越獨遊　石田黑子軒

文苑

武夫の華《脚本》　久摩志呂古宇譯

漁村の浦波　夢現生

新体詩　村上函峰

和歌　明石華陵

俳句　同

送小山春卿之東京序

鄉原德之賊也

吉津佐藤兩君墓表

詩四首

雜報

再び青年歌文會を戒む●書籍寄附●校友會委員●北辰會各部小會記事●寒稽古終了●擊劍部大會記事

北辰會雜誌第二十七號

論說

ビショップ　バルクレー

茨木清次郎

洋れ東西路三千里を隔て滄海高山其間に横て人類の交通未だ自由なるの機を備へざりしの時に當り會々東天の一大思想遙かに泰西の哲人に胎りしは怪り異この將た理の之を說くべきやは知るに由なしと雖道遠く而かも星移て二者の說酷似するものあるは亦以て一奇觀となすに足るべし第十八世紀に於て英國に一大形而上學者あり學德盛にして所論は一代を風靡し文學哲學亦倫理上に於て當國の思想界を一新せるの趣あり其名をジョージ、ベルクレーと稱す凡そ英國は四面海洋を繞らし國內丘陵連亘して氣候の寒溫山川の區分を始とし自然の形勢甚だ我國に類似せるを以て自然の影響を反照せる思想の情態も亦本邦に比喩すべきの現象あり殊に其哲學に在ては兩者性質を同ふし共に經驗的傾向を有して實踐躬行を重んじ之を獨逸一派の主觀的深遠幽妙なるものあるに比しては淺近れ毀を免れすと雖唯茫漠として空想に流れ易きの弊に陷るの患なく一切の理論時事に適切なるを尙ひ彼の徒らに心を幽遠に遊ばし以て幾多の理論を續繹するを欲せず故にヘーゲル派の行はるゝは難く專ら唯物論功理派等を喜ぶの傾あり バルクレー出るや恰も卽ち唯物論盛にして氣焰其極に達し苟も剏始特見の識を以て別に一派を開かんと企つるものあれば卽ち以て異端視せられ

狂と呼び賊と呼ばるゝ亦奈何ともすべからざるの時勢ありき馬氏能く其間に立て獨特の明を奮ひ四面の衆敵を辨難して一言の楚歌なからしめしもの其功實に偉大なりと謂つべし而して彼が成効の利器はと問はゞ吾人唯答ふるに太古迦毘羅城内に降生せし佛陀の思想と答へんのみ

蓋し人間思想の狀態は人種の異同によつて亦異同有り人種相同しければ思想從つて類同し人種同しからざれば思想亦表裏する事有るは明かなる事實なるが如し昔時應仁の朝儒教の始めて我邦に入傳せしや當時人心喜んで是を迎へ其教忽ち傳播して遂に今日迄本邦社會人道の根本主義たるに至りしは蓋し彼の孔孟の道が單に我が國民の思想上偶然相容るゝもの有りしのみに在ふず必ずや其間元々として理の存するものあふざるべからず何ぞや儒教は支那モンゴル人種の產物にしてモンゴルは即ち我が大和民族なれば也故に我國民は我が儒教を胚胎すべき基想の先天的に之を具備せるものありしなり而して其後二百六十七年百濟より佛像經文を献ず一度にして佛教の傳來を致せるや忽ち發して蘇我物部二氏の軋轢より引て國家の大亂となり爾來千有余年間兵馬の擾亂其源を異教に止むるもれ往々にして之を見るは豈に亦獨り佛教が我國民の思想と相容れざるの形ありしのみの所以にあらず即ち其教は印度アリアン人種の思想にしてアリアン族は我同胞にあらざれバなり故に我國民の思想は當初より彼に調和し難きの形態に存し僅かに親鸞法然の二師出でゝ之を倭化し得たるのみ以是觀れば人種の異同は即ち盡性異同の別うるゝ所にして太古印度が哲人を出せる事多きを今日西歐諸國がまた哲學者に豐富なるとを比較すれバ白哲人種は印度種屬と共にアリアン民族として考察力に長するの理も亦自ら明かるもの有るべし宜なり三千年を過ぎし東洋の

一大思想は曾て之を耳にせざりし歐州人士幾多れ口に出で獨り英國に在ても詩人としてはジョージ、メレディスとなり批評家としてはトーマス、カーライルとなり哲學者としては即ちバルクレーとなる然らば今茲に其一生より始めて聊か之を露はさんと欲す

馬氏千六百八十五年三月愛蘭ノール河畔ダイサルト城趾に生る其家傳へて脈を英國門閥に分つと稱す父をウイリアムと云ひ軍仕して佐官たりと雖其心性一般は殆んど之を知らず馬氏は即ち長子にてし性温厚品位あり夙に學を好んでキルケニー黌に入り次てダブリン大學に遊ぶ時正に千七百年あり學友嘗て彼か性行を傳へて曰く馬氏は事物を究めて止まず識權と習慣とに依て建創せるの教義は斷ずて之を排し苟も自覺を以て知るべからざるものは即ち容るゝを肯ぜず故にダブリン大學の傳說を去て遠く一個の見界を守れりと云ひしを見れバ彼が必世の新奇軸は正さに新世紀の曉天と共に既に其光彩を放てるものと知るべし當時物理哲學等の學は何れも尙舊慣に則り用書も陳腐を採て餘ありとせしも事物の新考察法は已に當國の思潮に傳播しニウトンの見界は知られデカートの學は入り加ふるに當時純正哲學れ大書ロックのエッセイあり又僚友間ブラウン、キングれ諸輩あり或は師仕して指導を受け或は同志結んで切磋磨勵に之れ勉め孜々として怠らず四年にして業を卒へ學位を受けて三年の後大學私教授となり次で學員に擧げふれ又希語教授となり學長の職を兼ぬ此間尙ほ哲理の研原を忘れず黽勉專らロック、プラトー諸哲の美を攻め忽然として發明する所あり Common-place Book 備忘錄を著はして自己の思想發達の順序を示し以て古來の考察的科學發展の進路を變更せしむべき掀思特見を顯はして明確なる持論の進行を論じあらゆる反對說

を打破して何れもロック、マルブランシ、デカート等の敎と許容衝突の有樣を明かにせり然れども此著たる固より老功の作にあらざれば其間蘊蓄せる所未だ甚だ深きを得ずスピノーザを知らず又ライブニッツを知らず此等諸輩の學事系統に對しては彼は何等の批評を試みたる事なく要するに猶專ら自論の建設に急にして未ざ博く力を他に加ふるの遑あらざりし也然れども其精神は爾來幾年あらずして其功を奏しデ、ロの二氏を師として彼が畢世の組織を發顯し唯物論を始め當時英國社會を左右せる科學を罵倒して亦顏色なからしむるに至れり此等の持論は卽ち千七百九年及十年の交に於て視像新論幷に人智原理の二書として出たるもの也後二年を經職を辭して倫敦に至り普く信を上流社會に結び又スウイフトの紹介を得て王宮に出入し學問親誼風采を以て廣く世人の尊重を受け名一時に揚る翌年貴族に隨ふて大陸に遊び歸朝して復び列國を訪ふ事五年將さに歸らんとするに當り South sea Bubble の爲社會の動搖を嘆嘆して英國策の一篇を草して以て彼が國事を憂ふる事腐儒の彙にあらざるを示し渡航の後は愛蘭に退て神學を敎へ二十四年にはデルレー敎會の重官を帶び同時に席を議院に列ね雄辨を以て議場を風靡し兼て心中企圖する所や有りけんベルムーダ島に理想的大學を設立せん事を申請し政府をして其設計に二萬磅の支出を約せしめ自ら準備として四年を費し本國の俗界其身に煩はしきを避けて千七百二十八年九月妻子と共に渡米し先づロード島に上り學業に余暇田地を購ふて耕作を起し土民と親て朋友を作り約束の金を待つ事三年然れども政府は遂に其約を履むを欲せざりしを見卽ち多年の計圖を棄てゝ歸る　元より政府に之を履行したふんには其結果は必ずや挑源の夢テニソンのプリンセスと何ぞ擇ばんと雖此一事は以て彼が議會に衆望を負へるを窺ふに足れり馬氏志既に成らず家に歸りて亦長子を失ひ落膽愁傷交至りしが猶學術の魂精は念頭を去らず子孫の遊學に便ぜんとて家族を率ゐてヲクスフォルドに來り閑靜に月日を送り千七百五十三年一月十四日愉安眠るが如くに逝けり享年六十九其地クライスト寺に葬る馬氏人と爲り德高く質厚く溫良の君子にして容風亦大に揚る故にアヂソン、スチールは彼を以て賞讚措かず國王ヂョーシ二世は愛敬の餘乞ふてピショップたらしめポープの狹隘容れ難きを以ても尙稱して天下の德一として彼に存せざるはなしと云へるを見ば國家擧げて其死を悼めりと聞くも蓋し誣言にあらざるべし

馬氏れ一生概略斯くの如し是より氏が造詣の一般を略述するに當り其破壞せる唯物論とは如何なる學說ありやを第一に討究するの必要あふん論者曰く吾人の知覺する世界は唯之れ物質に外ならず目を以て之を見耳を以て之を聽き鼻を以て之を臭くは物質なり口を以て之を味ひ四肢を以て之に觸るも亦物質なり物質有つて心あり心はたゞ物質に關して之を知るべく物質を離れて未だ心有ふず心あらざれゞ亦人なくあらゆる物の本源及本質は物質にして宇宙れ森羅萬象は悉く物質的實在にのみ還元し是を措ては未ざ曾て現象の何たるやを說明するものなしと蓋し此物の本源を物質と承納し吾人の精神的作用を物質より異なれりとせず心を腦と同一視し肉体的情勢より一切れ心的作用を誘繹し以て物質的機能の結果と考ふるの說をして當れりとなし物質を除ては吾人亦何をも知らずと云はゞ是が結果として宗敎的信仰は如何なるものたるべきやは直ちに推導せふるべき問題なりと雖英佛二國の人民は學者を始め久しく此說を育守して論據の無妄を知らず又其研究の

不足にして宗教たる世界は他一半を無視するを悟らず萬有は物質と物質に固有なる勢力とに依て解釋すべしと斷定し更ふに何等の疑念を狹み或は何等の異論を表はすを欲せず是に於てか卽ち物質とは何ぞや物質に就て吾人は何をか知るやとの問題は早晩起ふざるを得ざりし也　（未完）

耕地改良論

R、Y、生

緒論

四面繞らすに海洋を以てし西に支那朝鮮東印度諸國南に濠洲比津濱の諸島を控へ東は大平洋を隔て丶亞米利加に北は一葦帶水を隔て丶露領亞細亞に對す其天然の形勢よりするも又人口四千二百有餘萬の多數を有し其面積は僅に二萬七千〇六十二方里四、六ある我國の狀態よりするも商工業を以て立國の基とすべきは勿論にして余輩茲に喋々するを要せず而も余輩が幸に耕地整理の卒先地と稱せらる丶石川縣に就學し身自ふ其實況を目睹するを得たり之れ元より黃口の乳兒淺學菲才の敢て企て及ぶ所に非ずと雖聊か學事の餘閑其調査せし所を記す又故あるあり

吾人の生命を維持するに一日も缺く可ふざる者は食物なり而して其食物の大半は農業の供給する所あり現時我國工業大に開け貿易日を追ふて盛に世論專ら商工業を以て立國の基とすべしと唱ふるに至り稍や農業の世人の爲めに卑賤視せらる丶の傾向を生せり然れども世人が商工業の發達を主張する所以のものは必竟するに一般國民の經濟的生活を幸福圓滿ならしめんが爲めに外あらず何れの時代何れの國にありても國民の最大部分を占むる者は資產に乏しき細民あり而して細民は一般に其收入の大部を食物の爲に費さゞるべかふず故ふ食物の價格にして低落せざるときは如何に商工業進步するも到底細民の生活を安樂あふしむる能はざるあり食物の價格を低落せしむるの途は一に農業の進步に依らざる可らず然るに人口增加し商工業進步して製造品の價は次第に下落するに反し農產物殊に穀物の價は益々騰貴し之が爲め國民れ最大部分を占むる細民は維然として生計の困難を免れず夙夜額に汗して漸く其口を糊するの境遇に在るは實に現今經濟上の最大缺点なり故に農業改良の必要なるは商工業の改良の必要に讓るとあきは爭ふべこのふざる事實あり特に工業は一般に其原料の供給を農業に仰ぐものなるが故に單に工業進步の点より見るも農業の忽にすべからざるは明のなり

然るに或論者云く維新已前鎖國時代に在ては自國に產する所を以て自國全体の人民を養ふれ必要ありしからんも既に萬國交際の途開け通商貿易盛に社會經濟の發達せし今日に在ては自國の物を以て自國の用を充す如き偏狹なる方法を取るの要なく寧ろ我國の如きは農業を捨て丶專ふ商工業の發達を期し以て無用を有用に換ふるの利をなすに若うずと論者の云ふ所は實に經濟の尤も進步したる英國の現に採りつ丶ある方針にして經濟上の地位英國と酷類する我國に於ても大体に於ては將に此方針を採ふざる可らず然れども茲に最も注意すべきは我國民は歐米諸國民と異ある特種の事情の下に立つが爲め全く彼等と同一の方針を採る能はざると之れあり蓋し國民の常食あある者は一朝夕に變更するとを得るものにあらず歐米諸國人の常食たる小麥は殆んど世界共通れ農產物と云ふべく今日英國民が食しつ丶ある一片の麵麭も其原料たる小麥の產地を尋ぬればミシシッピ

ーラブラタの平原より出たるものと露西亞の黑土地方或は濠洲の平原地方より出でたるものと相混して一塊を爲すものあるべし歐米各國民は古來慣食したる小麥を世界何れの部分より得るも自由あり從つて彼等は自國に於て小麥を作るの不利あることを見ゞ直ちに其資本勞力を農業より商工業に轉するとを得べし我國民の主要なる常食品は米なり世人思えふく米の產地は獨り我瑞穗の國に限るにあらず西隣の支那朝鮮を初め東印度馬來半島何れも米產國にあらざるはあし而も此等の諸國は自國の需用を充たして尙ほ年々巨額の產米を世界に供給し得るの餘力あり特に其價格は我に比すれば甚だ廉かり故に我國民は農を捨て工に移るの便を有すると尙ほ歐洲先進國と同一なりと云はざる可からずと然りと雖我國れ米は殆んど我國の特產とも云ふべく諸外國の米と非常の差異あり特に現今及將來廉價に且つ巨額に世界の市場に供給し得る所の外國米は世俗南京米と稱し緬甸暹羅安南等より出づるものにして名は齊しく米なりと雖之を我產米に比するときは其質と味とに於て非常の差異あり從て二千有余年來特種の美味を有する日本米を慣食したる我國民は日本米の價格非常に騰貴し生計上己むを得ざる場合にあらざれば南京米を食せざると明かなる事實なり若し廉價なる外國米にして日本米と其品質相同じきと歐米諸國の小麥の如くならんには農業は勿論日本米の耕作を減ずて外國米の輸入を可とするものなりと雖品質劣等なる外國米を以て日本米に代へ以て國民の主要食品の標準を下ざすとには大に反對せざるを得ず又實際に於ても外國米を以て日本米に代ふるとは容易に行はるべきにあらず現に日本米の價格非常に騰貴したる場合に於ても生計上止むを得ざる貧民れ外は成るべく外國米の食用を避けんとするとは爭ふべからざる事實なり果して然らば歐米諸國と異なり工商業の隆盛を計ると同時に農業の改良を計らざる可らざると明かなり

且つ我國に〳〵て一朝難を外國に搆へ不幸にして敵の艦艇我四周に逼るあらば仮令ひ萬國公法は國民の必需品を差抑へざるを規定するとも元と萬國公法は一の自然法にして强制的の制裁の附隨するなく從つて敵國にして奮激の結果道德心をも忘却する場合あらば之を破るも如何ともする能はず若し亦此規定を〳〵て遵奉せらるゝとするも敵艦近海を巡航して船舶の搜索を行ふとあらば如何して迅速に且つ充分に食糧品を我國に輸入するを得ん斯くして月を累ぬるあらゞ遂に食糧の缺乏よりして我國は戰はずして降伏の止むを得ざるに至るやも知る可らず幸に〳〵て我國の農事遺利未ゞ全く拾ひ盡〳〵たりと云ふに非ず本州東北の地北海道臺灣之が開墾を要する所少なからず且つ既に充分の開墾をなしたると稱する地も之が耕地整理を行へゞ其面積をして增加せしむるのみならず又大に其地產力をして增進せしむるとを得然るに世人は商工業にのみ重を置き農業を輕視するの傾向あるは豈に嘆ずべけんや左に其主要なる統計を擧げて商工業と農業との間に進步の間隙あるを示さん

紡績業

	明治廿九年	同　廿八年	同　廿七年
工場	六三	四八	四五
錘數	七五七、一九六	五八〇、九四五	五三〇、〇七四
綿糸出來高	二〇、九四三、三七六貫	一八、四四一、〇九四	一四、六二〇、〇〇八

民行鑛山業

金	二五六、五一九匁	一五〇、〇四七	一二一、二八〇	
銀	一七、二〇九、一二三	一七、〇〇〇、九〇〇	一六、六九三、六一七	
銅	五、三五四、三三八	五、〇一一、五一九	五、二三四、九七一	
鉄	六、九九五、三一三	六、五六二、八六四	四、八六〇、三九五	
石炭	五、〇〇五、〇七四噸	四、七四七、七〇七	四、二三八、九二九	
工場數	七、六七二	七、一五四	五、九八二	
職工數	四三六、六一六	四一八、一四〇	三八一、三九〇	

以上列擧せる紡績業鑛山業に付明治廿七年より同廿九年迄での進歩を見るに其出來高及發堀額に於て著しく增加す殊に金の發堀量に至ては廿九年に於ては廿七年の倍數己上に及ぶを見る最終に擧げし工場數並に職工數は諸般の工業の非常ある進歩を示す者あり又貿易に付て見るに次の如し

輸出入合計金額

三一九、八四五、六二五　二七六、二三九、九一二　二三四、九五四、一八一

左の表に由り貿易の年々非常ある進歩を以て增加するを見るべし勿論近年我國戰後の結果として軍備擴張及び人民生活れ程度の進みし等の事情よりして常に輸入輸出に超過する〻傾向ありと雖も兎に角彼我國際間に於ける取引は年々に增加しつゝあるを知るべし殊に近年我國交通機關れ發達は驚くべき者にして電信電話鉄道線の延長の如き商船數郵便物の增加の如きは皆交通貿易の盛況を示すものなり之に反して農業の發達如何を顧れば實に其遲々たると豫想外に在り其中養蠶製茶の如き副產物に在ては貿易の盛衰により其產出高に增減あるも概して云へば近年は多少其產出額を增す傾あり然れども其主生產物たる米麥に至ては勿論天候の如何に依る可けれども作付反別に比し其收獲高の增加を見ず下に表を以て之を示す

米麥作付反別及收獲高

年次	米 作付反別 町	米 收獲高 石	麥 作付反別 町	麥 收獲高 石
明治廿九年	二、七八九、九八九、四	三六、一九九、七七一	一、七六四、六九〇、六	一七、三二五、三二一
廿八年	二、七七九、二二七、一	三九、九二〇、八八二	一、七七一、六二三、六	一九、五二六、一二三
廿七年	二、七五一、〇四四、八	四一、八六五、八九六	一、七五一、〇一二、八	一九、八〇九、九六五

上に示せゝ如く作付段別に於ては稍增加するの傾向あり從つて年々の天候をして均一あらしめば比例を以て其收獲高に於て增加を示すべき理なるも反て反對の現象を呈するを見る之れ全く天候の如何に依るとは云へ又農業れ施設宜しきを得ざるも其一因ならん然れども農業も全く停止体狀態にあるに非ずして多少の改良の行はれつゝあるは事實なり或人の調査によれば米作は次下の如き增加の量を表はす

從十三年至廿二年　一反歩平均收獲　一石三斗

從廿四年至廿九年　同　一石四斗三升七合

右の如き少量の增加を見る然れども彼の商工業の年々歲々長足の進步をなすに比せば殆んど同日の論に非ず然れども此增加たるや人口の增加に從ひ米の需用加はり爲めに耕作の資本勞力加はりし結果として見るべく決して耕地の整理農改良の如き進步より得たる者と見る可ふず余輩の目擊する所の農民の多數は依然頑迷固陋にして敎育なく唯祖先れ舊慣により無意識的に服從して決して改良發達の意志なし是を以て收獲れ增加を希ふも如何してか之を全ふするを得ん

且つ我國の人口增加は年々其數を增し明治廿二年より卅年に至る間の人口平均增加數は卅八萬〇四百十六人あり然るに國民の常食たる米の平均增加額は甚だ僅少にして供給は其需用を充す能はず今人口一人に付一年米れ消費額を九斗五升九合とすれば一年人口平均增加數卅八萬〇四百十八人に對し年々卅六萬四千八百八十四石を增加するを要す然るに實際は一年間米の平均收獲增加量は九萬二千二百六十五石に過ぎず卽ち人口の增加に伴ひ要する額の四分の一を充すに過ぎず而して此現象たるや一方に於ては外國米の輸入とあり他方に於ては國民の粗食に甘んぜざる可らざることを反證するものあり加之ならず我國封建時代の餘習未だ全く去らず國民の多數は因循姑息にして遠く萬里の波濤を越へ移住を企て商業に勞働に各其職業に就き以て己を利するを喜ばず寧ろ掌大れ地に愛着し貧に甘んずるの風あり明治卅一年に於ける我國より海外に出稼せし勞働者の數を擧ぐれば其取扱會社は神戸渡航合資會社以下九會社にして其人員總二萬三千四百五十人に過ぎず之に他の手續を以て渡航せし者を合するも年々れ移民は三萬內外に過ぎざるべし之を增加人口に比するに僅に十分の一にも充たず若し斯る形勢を以て進まば我が國人口の增殖は日を追ふて甚だしく之に伴ふ食料の增加を以てするにあらざれば遂に人口過多の憂を生ずるに至ふん然も我國多數の人民は農業に從事する者なるを以て之が改良進步を謀り以て人民過多の憂を生ずるの日を緩ふせしめ其間を以て商工業を策勵し海外移住の道を講し以て全然此等の憂を豫防せざる可らず

尙ほ近世理大學の進步よりして各種の生產上至便なる器具器械發明せらるゝに及び小企業は變じて大企業となり卽ち室內工業は工場工業に步て讓るに至れり大企業の小企業に勝れるとは世人の認むる所にして大企業に在ては事實上一定の秩序を生ずるが爲生產物の出來高に比して生產費に減ずるとを得且つ生產要素れ配合を適當ならしむるを得分力法を充分に實施するとを得るが故に一層生產要素の効驗を大ならしめ然も信用並に搬路を擴張する爲の諸制度を一層有利に使用することを得るが故に從ひて其生產品の價格も廉に品質も佳良に出來高も巨額なるを以て爲に其搬路を擴張すると大なり是を以て漸次小企業家を壓倒し勢ひ彼等をして其職業を捨て他に轉ぜしむるの止むを得ざるに至らしむ我國綿糸紡績會社大に興るに至りてより芽屋燈下に老媼錘車を紡ぐの音を絕てたる蒸氣力或は水力を以て米搗の業起りてより壯者杵を以て之を爲すの止みたる壯篁田甫の間雲際に聳めるの煙突黑煙を吐くの製糸場起りてより少婦三伍々相集りて指頭を以て生糸を繰るの家其數を減ずたる皆之れ其一例なり小企業家斯く其職を失ひ他に適當なる業を得れは可然らざれば勢甲を脫きて大企業家の軍門に降り勞働を執るの止むを得ざるに至るもの少しとせず而して大企業に於て得たる總益は地主資本家勞働者及び企業家の間に分配せらる然るに現今大企業家の實情を視るに企業家は純益の大ならんを希ひ而も地主資本家の苦情を恐れ之に喰はずに相當の

利を以てするも獨り勞働者に至ては無智の輩多きを以て之に臨むに威を以てすれば尙彼等を壓するに足る故を以て企業家は出來べく丈之が勞銀を減少せしめんとし且つ勞働者は他方面に於て人口は增加失產者多數に供ひ其數を增すを以て需用供給の關係より自ら其勞銀の下落するは又止む得ざるなり勢如此なるを以て資本家地主大企業家の如き優者は益々富み小企業家勞働者の如き劣者は益々貧しく貧富の懸隔をして大ならしむ而して其貧者と云へ雖身体を支ふる食物は一日も缺く可らず然るに其食料を供給する農業を捨てゝ顧みず之が進步改良を保つべく商工業の發達人口の增殖に伴ふと能はざらしめば需用供給の關係よりして米價は益々騰貴し勞働者が一日間苦心慘憺して得たる勞銀は一家族一日は米價を償ふに足らざるに至ては如何してか彼等心身を休養するの間あらんや其局や經濟社會は尤も恐るべき疾毒とおせる同盟罷工起りて勞銀の增額を迫るに至り引て一般商工業上に餘波を及ぼし所謂經濟上の恐慌起る然も其弊や經濟上にのみ止まらずして遂に社會上に及ぼし富力平均の社會主義行はるゝに至ふは其弊毒の及ぶ所知る可からず古人曰衣食足而知禮節と衣食の原料を供給する農事豈忽にすべけんや思ふて是に至れば農業の改良進步は今日商工業の隆盛に伴ふて尤も必要ある事業にして之が實行に於て尤も務めざるべかふず其改良の諸事項中に於て余輩の尤も有利ある者と考ふるは則ち耕地の整理之れあり是を以て吾人聊か之が實地調査を試み次下本論に於て其精細を述べんと欲す

史傳

史海指鍼（續）

浦井恒堂

猶ほ進みて近世時代に至る時は余輩が既に中世史に於て感ずたる困難は愈よ增加し殆んど凡これ歷史は皆ある國ある特殊の時代を論ずるにあらざればある人の傳記にして時勢の大體に涉りて評論を試みたるもの極めて尠し其内に於て余輩が第一に推さゞるべからざるは佛人ミシュレー氏の著せる近世史摘要（Jules Michelet: Précis de L' histoire moderne）なるべし氏は近世佛蘭西歷史家の鏘々たる者にして一七八九年生れ一八七四年歿す一七八九年は何くも知る如く佛國大革命の破裂せる時かれば氏は奈翁全盛時代ボルボン王朝の再興七月革命二月革命等の最も變遷多き時代に遭遇し之を親睹し得たるのみならずナポレオン三世の時には自ら歷史中の人物となりクーデターのため其職（文書局長）を罷められにき氏の大作は佛國史十六卷（Histoire de France）にして一八三三年初卷を公にし同下き六七年完結す其他多くれ著述あれども最も世に行はれたるは前述の近世史摘要にして一八三三年初版出でしより版を改むること二十餘回に及べるを見ても其如何に世人に觀迎せられたるかを知るべし Simpson 夫人之を增補英譯一題して Summary of Modern History といふマクミラン會社より出版し價僅に一圓五十錢に過ぎず蓋し簡單なる近世史の上乘の者といふべし勿論教科用の目的を以て編纂せる近世史は數種あれど是は趣味に乏しく今我輩の問題以外

に屬するを以て述べず

如此近世史全体に通せる著書極めて尠きに因り余輩は止むを得ず近世史を六個の重なる段落に分ち其各時期に關して最も著名なる者を擧ぐるあとゝせむ

(一)歐州諸王國(ナショナルキングドム)の發生及び現今の歐州國系(ステートシステム)の起源の時代

(二)文(レチーサンス)興復興時代　是は前者と同時代にして彼は政治的方面より觀察し是は專ら文明的方面より觀察したる者なり

(三)宗教改革及び宗教的擾亂の時代

(四)三十年戰役の終局より七年戰役に至るまでの時代　王位繼承戰役領土膨張戰役植民地爭奪海上權掌握に關する戰役を以て此時代の特性とす

(五)前第三及第四の特殊の場合なる政治的革命の最も著しき者(甲)十六世紀に於ける阿蘭の獨立(乙)十七世紀に於ける英國革命(丙)十八世紀に於ける米國獨立の三大事件に關する者

(六)佛國大革命及び十九世紀に於ける自由主義發達の時代

先づ第一期に於ては Milliam Robertsond The History of the Reign of the Emperor Charles V あり三冊又は一冊とす此人は蘇國の歴史家にして(一七二一―一七九三)エヂンボロー大學の長たり氏の著述には此書の他蘇格蘭史亞米利加史などあれど最も有名なるは此査理五世史にして氏は此書に序論として羅馬帝國に分裂より十六世紀に初に至るまでの歐州社會の概論を附加せり要するに此書は多くの英國史に於てクラシックとして認めらるゝ者にして既に百年前の著述に係かれども査理五世時代に關する最も大切なるオーソリチイたるを失はず其他以太利建國に關しては Sismon-di Histoire des Républiques Italiennes du moyen Age を以て最良とす此原書は十冊より成れど英國にては其煩を芟り要を摘みて一卷とし題して Italien Republics といふ佛國の事實はミシュレイに憑るべく西班牙は米國に歴史家 Trescott 氏に History of the Reign of Ferdinand and Isabella (米國出版は三冊英國出版は一冊)を可とし英國に關しては著名なるハラム氏憲法史と見るべし近頃の出版にてはグリーン氏又はブライト氏等を可とす如此數多の書はあれど十六世紀の歐州史の概要を窺はむためには前述のロバートソン氏の著を以て最も適當とす

(二)文運復興時代に關ては瑞西人の Burckhardt の Geschite der Renaissance in Italien 佛人ミシュレイ氏の佛國史及英人 Symonds 氏の Renaissance in Italy を以て三副對と稱せらる獨人の書は批評精透を以て鳴り佛書は簡明を以て著はれ英書は其大部なると(五卷)最も詳細なることを以て名あり而して此時代の概念を得むにはロレンツオメヂチ、コロムブス、等の傳記を讀む可く又はドンキホーテの如き不朽の歴史的小說を讀むも至りて興味あるべし要するにレネサンスの如き混雜したる時代は到底一貫したる歴史を有する能はずハラム氏れ大著といはるゝ文學史 Literature of Europe in the 15th, 16th, and 17th Centuries の如きは其目的に庶幾かゝむ

(三)宗教改革時代に關して最も著名なるは近世歴史家の泰斗たる獨人 Leopold von Ranke氏の History of Popes (英譯三冊)とす猶列國に就きて研究せむとならば獨乙革命は同氏のランケ氏の History of the Reformation in Germany(英譯三冊)英國は Froude氏若くはグリーン氏の英國史和蘭は Motley

氏佛國はミシュレイ氏の著に就き學ぶべし此時代に關して余輩が特に紹介せんとするは佛國のボスエー(Bossuet)の著 Histoire des Variations des Eglises Protestantes にして英譯して The Variations of Protestantism と云ふ舊教徒の辨護者として最も著名なりしに對して新教徒のチャムピオンはD'Aubigne, History of the Great Reformation of the 16th Century in Germany, Switzerland &c. にして其銳鋒當るべからずとの評あり

(四)三十年役以後七年戰爭に至る時代は前述のミシュレー氏の近世史摘要に於て特に能く寫されたり其他詳細に此時代を記述せる者は

Voltaire, Age of Louis XIV and Louis XV

Lord Stanhope, History of England, Comprising the Reign of Queen Anne until the Peace of Utrecht (1701-1713) 2 Vols.

Carlyre, History of Frederick II 6 Vols. or 4 Vols.

Henri Martin, History of France: The Age of Louis XIV and the Decline of the Monarchy. 4 Vols. (英譯)

Lecky. W. A History of England in the 18th Century. 2 Vols.

の知さあり皆此時代に關して最も著名なるものなりされど此等は孰れも大部のものにて頗る專門的なれば普通にはミシュレーの摘要を以て滿足せざるべからず

(五)同じく和蘭英吉利亞米利加に起りたる革命の如き最も興味ある事件に關しても一般讀者に適切なる書に乏しきは遺憾とすべし是等の事件は各獨立ある其國史に就きて學ばざるべからず最も有名なるモットレイ氏の和蘭史は三種の著より成れり即ち

The Rise of the Dutch Republic, 3 Vols.

Histoty of United Netherlands, from the Death of William the Silent to the Twelve Years' Truce, 4 Vols.

The Life and Death of John of Barneveld, Adovocate of Hollad. 2 Vols.

ギゾーの英國革命に關する著も同じく三種より成る

History of English Revolution

History of England under Cromwell

Life of Monk. これなり

米國史の最も好評あるは

Bancroft. History of the United States from the Discoveay of the American Continent to the Cliss of the Revolutionary War. とす

されど以上の大作は到底僅の時日を以て通讀し得べきにあらざれば余輩は特に次の三種を選擇して必讀の書となさはんとす

1. Motley—Rise of the Dutch Republic 3 Vols.

2. Carlyre—Oliver Cromwell's Letters and Speeches. 3 Vols

3. Irving—Life of George Washington　種々の出版あり一冊乃至五冊

此三著は文章の艶麗あるはいふまでもなく和蘭に於けるウヰリヤム英國に於けるクロムウェル米國に於けるワシントンは實に其國に於て未曾有の大運動の首領にして又孰れも其時代の最上の摸範たるべき資格を具へ其人を知らゞ以て其時勢を知るべし特にカーライルのクロムメルは歴史文學中甚だ重要のものにして此書一度出でゝより前二世紀間に於けるクロムウェルに對する世論を一變せしめしといへり蓋しクロムウェルは王政復古時代の記者に因り凡ゆる點に於て故意的惡名を與へられたゆに世人は此一偉人の眞想を誤解するに至りしがカーライル出でゝより始めて從來の誤を明にするを得たり勿論此書はクロムウェルの傳記にあらずカーライルが英國革命史を編まむとて蒐集し置ける一史料に過ぎず

(六)一七八九年の革命に關し最も著名なるはカーライルの佛國革命史にして詩的歴史れ好摸範として世人の愛讀する所なり氏の燃るが如き熱情は愛憎共に極端に走るの弊無きにあらざれど其文學的價値に於ては現世紀の散文中此書に及ぶ者殆んど稀にして優にスキデデスと比肩するに足り現世紀の世人の政治的及社會的觀念に至大なる影響を及せりされど科學的歴史の點よりいはゞ決して此書を以て佛國革命に關する唯一のオーソリチイと爲すべからず必ず他の歴史を參照するを要す佛國革命史の名あるは史學の泰斗レオポールド、ランケ氏の高弟 Heinrich von Sybel の著 History of the French Revolution (英譯四冊) 佛人 Michelet の History of the French Revolution 同ドく佛人 Mignet History of the French Revolution 共に英譯一冊等なりとすシーベルの著は一七九五年コンバンシヨン、ナシヨナルれ解散に終りミシユレーは專ら革命時代の初期に力を盡しミンエーは奈翁の亡ふる迄を論ずれども同じく革命れ初期を論ずること最も詳あり此三書の內簡にして要を得たるはミンエーを推すべし英人の著述にては Sir Archibald Alison　History of Europe from the Commencement of the French Revolution in 1789 to the Restoration of the Bourbons in 1715 (倫動版は十四冊米國版は四冊) 及び同氏の History of Europe, from the Tall of Napoleon in 1815 to the Accession of Louis Napoleon in 1852 (倫動版は八冊米國版は四冊) の如き極めて有名のものなりされど甚だ大部の書にして通讀に困難なるにより近頃アーキボールド、コンステーブル會社に於ては此書の摘要(エピトミー)一冊を出版せり

Fyffe 氏の History of Modern Europe は一七九二年佛國が墺國に對して宣戰せるに筆を起し一八八四年に至る亦た簡にして要を得たり氏は極めて有望の歴史家ありしが不幸にして早世せり此書はカッセル會社の出版にして近來同社は此書のチープ、エヂシヨンを出せるを以て一圓數十錢を以て購ひ得べし

最後に現世紀の社會的物質的進歩を通論せる書は甚だ乏し余輩が最良の者として推すべきは英人 Charles Knight の The Popular History of England なり此書は主として力を社會的事實に注ぎ古代より現代に至る且つ此書も最も有益なる挿繪に富めり蓋し氏は一般國人に向ひ出來得る限り通俗的に社會の發達を語らむとせるものにして文章平易なれど證ずべく記事豐富にして通俗的歴史の上乘ゐ位し彼のグリーン氏のみ僅に之に比すべし特に此書れ長所は普通の歴史と異りて近代に

至るに隨ひ益す詳細を加たる點にして前半部を以て一六八八年れ革命までを論じ後半部を以て近代を述たり

雜錄

印度佛教史に於ける聖龍樹

G、T、生

茫々たる亞細亞の南部には、三大半島れ海中に突出するあり、其中間に位する者を印度とす、印度は埃及「アッシリヤ」「バビロニヤ」「猶太」等の古代文明先進國の隨一にして、世界の文運に貢献したるもの敢て少しとせず、殊に紀元前六世紀れ末に起りて、幽妙深遠の眞理を說ける彼佛教は、其影響を東亞の舞臺に及ぼせしこと、猛烈なる颶風の如き觀あり、見よ、佛教は東方緬甸、暹羅、安南、西藏、蒙古、支那、日本、に傳播し、南方に於ける錫蘭、東南に在る爪哇、皆其風化を蒙りぬ、西歐に於ては今日未だ顯著なる史的事實を發見する能はずといへども、亞刺比亞、希臘の如き、そが影響を受けし痕跡往々發見せらるとを得たり、故に曰く、印度れ世界に附與せし尤も偉大たる產物は金銀寶玉にあらずして解脫の使命たる佛教の胚胎なりといふを以て其當を得たるものとす、

釋迦文佛の涅槃の雲に隱れてより一千餘年間の佛教史を繙うんが、印度に於て一盛一衰を免れずといへども、其間幾多人物の輩出するあり、深遠なる思索と偉烈なる活動とは、飛雲走潮の如く、光彩陸離として間に千載の偉觀を呈せり、吾人は今其中に就きて尤も多面なる、尤も思索に富める、南天大乘佛教の唱道者たる聖龍樹の佛教史上の位置を論せんとす、

佛教の產出以前已に「アリヤン」南下時代に於て、吠陀神活的宗教あり、其漸く考察の深遠に進むや、優婆尼沙土の哲學とあり、更に一轉して婆羅門教とあり、其教の腐敗溷濁は、四姓を區別し、暴橫を極め、世を害し人を毒すること甚しく、衆生れ渴望に應ず世界の要求に對して、紀元前六世紀れ末、二月八日花咲ひ鳥歌ふとき、中天竺迦比羅城の一園、藍毘尼憂樹の下一大光明の輝くあり、是を釋迦佛の降誕とす、世尊三十にして成道し、以后凡そ五十年、至る所法輪を轉し、四諦八正道の福音をつけ、以て群萌を化益せり、佛滅後、徒弟教團を設け、遺法を誦し遺戒を守り、一味和合、敢て異議なく烏兎一百年を經過したる后、遂に大破裂を生ずるに至れり、されば上座大衆の二部幷立れ源根なり、今其起因を尋ぬるに、摩竭陀國無憂王の時代に當り、摩訶提婆なる僧侶五事を唱出せり、曰く、五事とは餘所ゝ誘無知猶豫他令ゝ入道因ゝ聲起放是名眞佛教といふもれ之なり、此五事につき異說紛々として惹起し、分れて兩部となれり、則ち進步思想を有するもの、或は好奇心を抱くもの等は、摩迦提婆の所說を賛して大衆部を形成し、着實なる思想に沈むもの、或は頑冥なるもれ等は、從來の舊說を固執して上座部を組織せり、毘婆沙論、異部宗命等には摩迦提婆を惡人の如くすれども、決して然らざるべし、その佛門に入らざる以前に當り、放恣無頼の行爲ありしといふは或い然らむ、然れども其唱出せる五事は、上座部一派の攻擊するが如き暴妄無稽の立義に非らず、もし全然無暴無稽の立義とすれば、決して多數の賛成を得、大衆部を建

設する能はざるべし、殊に後年、上座部の人此立義を依用するものあるを以ても、其價値を無視する能はざるや明らなり、大体より之を觀れば、大衆部は高遠なる形而上的論に富み、戒律に對して寛容なる竟見を有せり、是れ蓋し時勢の變遷と社會の境遇とは必然の勢に制せられたるならん、上座部は理論單純、當時の人心を滿足せしめ能はざるに似たりといへども、戒律に對しては至嚴なる態度をとれり、思ふに後世馬鳴龍樹の大乘思想は、既に大衆部の中に胚胎せしや疑なし、之を二百餘年にして大衆部又九つに分る、根本大衆部、一說部、說出世部、雞胤部、多聞部、說假部、制多山部、西山住部、北山住部、之れなり、上座部も又時勢の變遷に伴ひ、三百年より四百年に至る間に於て、說一切有部、雪將部、犢子部、法上部、賢冑部、正量部、密林山部、化他部、法藏部、飲光部、經量部の十一部となれり、佛滅凡そ四百年の頃、有名なる阿育王深く佛教に歸依し、諸國に向て大に傳道布教につとめたり、然れども此時に於ては別に宗派の分裂、教理の異議起らざりしが、佛滅凡そ六百年迦貳色伽王の時代に及び、幾多は宗派起り論爭極めて熾盛なり、印度は北方迦濕彌羅は、說一切有部は根據地となり、南方摩訶陀は、大衆部强盛と極め、互ひに辨難攻擊を事とせり、依て說一切有部は迦貳色迦王に說き、宗義統一のため佛典は結果を成さしめ北方の國都「ジャーダラ」に五百は大阿羅漢を會し、昆婆娑論を結集せり、大乘佛教の創唱者馬鳴亦此結集に參せり、馬鳴は英俊卓識の人、淺近なる說一切有部の教義に滿足する能はず、雜然たる有部の多面的教義を捨てゝ、一心二門の汎神的教義を唱道せり、これ北方佛教の一大變化なり而して此積極的肯定的にして「有」の性質を有するは始終北方佛教の特質なりと謂ふべし、其後

凡そ一百年を隔てゝ、南方に曠世の偉人龍樹現はれたり、龍樹幼にして慧敏聰明の質蔽ふべからず、昆陀は無論、當時行はれたる學術技藝は皆其通曉する所となりしも、多才多情の年少たる彼は、又た一度肉慾の深淵に墮落せり、然れども倏然親友三名の横死は、雲翳去りし明月の光澄み渡るが如く、驟雨一たび過ぎて天地爽凉を覺ゆるが如く、翛然「慾爲苦本」の深旨を會し、佛道を慕ふて僧となり、遂に佛教界の驍將となれり、始め小乘三藏を學び盡し、然るも猶足らずとして、普く諸國を周遊し、深山幽谷に蹈み入り、深義の經典を探り、雪山に登りて一比丘より大乘の經典を受け、龍宮より華嚴經を得、鉄塔を開いて大日經を得たり、思ふに此間獨り佛教の研究のみならず、種々の學術を研究したるや明なり、其著書によりて考るに、醫、占星、論理、文法學、等皆其精通せし所たり、彼は是等の諸教諸學を總合し、更に一層深遠の思索により、其結果大乘新佛教を唱道し、破邪顯正に於て全力を傾注して「空」大乘を唱へり、彼は從來の小乘各宗派を以て、淺近膚薄なりとして之を斥け、釋迦世尊は聲聞淺機の爲めに摩訶衍を說かず、唯大機利根の爲めに之を說けり、我「空」大乘は卽ち其摩訶衍なりと云へり、此摩訶衍を以て小乘以外にありと主張するは、獨り龍樹のみならず既に馬鳴も其軌を同うすといへども、唯其異る所は馬鳴の教義は汎神論的にして、龍樹の主義は無宇宙論的なりし點にあり、且つ馬鳴は北方佛教に一大變化を與へしも龍樹は南方佛教に向て一大革新を爲せり、實に龍樹の有せる思想の博通と深遠とを兼ぬる所以のもの、其千部の論師と謂はれ、其八宗の祖師と仰かるゝを以て見るも明なり、然り而して彼は冷靜なる學理の探究者のみにて終るものに非らず、其誠熱の燃々たる、原を燎く火の如きもの

あり、其信仰の活火は遠く後代を照し廣く群生を濟へり、洵に凡夫衆生の大光明たるに耻ぢざるあり、猶龍樹の八宗祖師たる所以を陳べ師の涅槃論に及びて其結を了らんとす　（未完）

厭世雜觀　（承前）

璞　哉

厭世には、又受働的と活働的との二種あり。彼の區々として、世故の難に堪えず、其神心已に、浮世の角鬪に敗績して、遂に情に打ち勝たるゝ時は、即ち受働的とゐるあり。彼等は必竟、泣て見るに非ずんば、苦笑して、世を冷眼視し去るの外なく、我國の所謂厭世詩人と稱する者、比々皆然あり。此故に、其の詩想は豆の如く、從て柔弱なる者のみ多く、「バイロン」か狂熱、果た「ハイネ」が所謂、辰星の赫けるには、黄金の釘もて支へられたる天空を絶叫せしの雄大は、遂に覓むべくもあらず、彼等は宇宙の大使命を無にし、私人の存在に對して、余りに多くの集注力を投せしが故、意思の苦悶は、端なく破裂して、薄志弱行の全弊を招くに至りぬ。西行は然り、長明は然り、一片の落英遂に枝に返らず。嗚呼秋風一陣、颯として湖心更に渦攻を印ず、彼の一葉を浮べて、遂に掉すに由なき者、所謂我献身的厭世家は委く此の類あり。更に樂天的厭世家にして、其受働的に出でし者あり、白樂天、淘淵明、其適例とあすに足るべく、即ち前述の我所謂樂天的厭世は、恰ど之を意味するに過ぎざるの感あり。即ち之は、退ては受働とあり、進では活働するの、其の過渡期の狀態に外あらずとす。

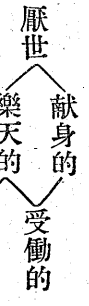
反之、飜然として悟り去れば、是非正邪皆之仮名のみ、我に對する所の衝突何ぞ恐るゝに足らん

と、敢て之と拮抗せんとするの念を湧發する者あり、之即ち活働的あり。如斯觀ゝ來らば、千浪萬濤の浸し來るあるも、毅然として之に當り、偉大なる事業を遂げ得るの機も出で來るべく、千挫不屈にして、以て人世は眞面目を解し得べし。史に稱す、彼の雞林八道を席捲し、明大陸をして震動せしめたる征韓役は、隨に豐公其人は、活働的厭世觀に由て、其素をなせし者ありと、彼の豐公が寵兒鶴松を亡ふや、哀悼悲壯日夜涙を絶たず、一日清水寺の塔に上り、概然として世故の理わりを悟り、乃五大老を會し、相咨うて曰く、今や天下治平、四海安泰なり、此時に當りて、韓を先驅として明を亡ぼし、皇室を支那に移さんとす、余や今愛兒を失て、憂心絶ゑず、顧みれば人生百年に充たず、何ぞ鬱々裏に醉生夢死すべけんや、諸士以て如何となすやと、彼は寺塔に瞑目して、湧き來る悲壯の觀に打たれぬ。蒼天を仰ぎては、神星は尚ほ墜落するを思ひ、大塊を俯しては、幾多の形骸、空しく永久の夢に入るは墳墓地なりと觀じ、茲に端なく厭世の動機に魔せられぬ。而も彼や容易く世を悲觀し去るほどの小なる者にあらず。彼は悟りぬ。然れども彼は冷元ざりき。大なる豐公は大なる活働的厭世觀に由て躍出しぬ、即ち空前は遠征とはありにしなり、嗚呼厭世の動機は、茲に國史の上に千古不滅の美を添えぬ。徒らに厭世を以て小なりと罵る事勿れ。彼の又亡國の士が、國破れて山河空しく在ずるの悲境にありて、萬里の天に沈淪し、夢魂徒らに、憂心を脱して墳墓の地に走る、鬱々として天涯萬里の空に泣けば、潸然として血涙降るを覺えず、而も中に在ては、悠々として恢服興國の術を計り、一度死の門戸は開くるや、從容として死を悅んで、浮世を捨つる事敝履の如く、忽焉としてはさらばを告ぐ、何等反動の勢力ぞ。

所謂之れ猛狼一聲、群山を壓し去て、山月高天に仲する底の類、之亦活動的厭世ゥ現はしたる、壯絶の摸形にあらずとせんや。而して之は決して、彼の献身的厭世家の望み得べき所にあふず、唯樂天的厭世が、歩一歩を進めて、大に活働せし時に於て到達すべき、必然の途程に於てあるなり。故に曰く、献身的厭世は委く受働的にして、樂天的厭世は、受働と活働との過渡にして、其の何れともあり得べき性質を有する物ありと。（受働的及活働的）

歩を進めて、今少しく考察する所あふしめよ。吾人は容易に此の活動的厭世にも、亦大小二樣の別あるを見ん。其の小なる物は自我を主とし、其の活動の對象は、範圍極めて狹少なり。彼の一身の名譽利益を全うし、唯だ自己が意志の圓滿なる活現を遂げんが爲めに活働するは、其最も小なる者にして、所謂之れ活働的厭世れ、亦消極的なるに外あらず、之を自我的と稱するを得ん乎。反之、人は常に自我的なる事能はず、道德進歩すると共に、他愛の念著るしく發達し、茲に其の活動の對象は、益々其範圍を擴張し、一門一家一鄕よりして、遂にあらゆる自我を擲て、一國の爲めに活働するの偉人を見るに至りては、恰も之れ清風光月の如く、一點の汚れなく、揮身の涙は注で愛他の念となり、其の偉大崇高、原より前者自我的なるの類にあらざるなり。要之、歸する所は濟世救國にあり、同胞の爲めに活動するにあり。之を稱して他愛的と云ふを得ん乎。「ベーコン」は說きぬ、愛なる者は諸德の王なりと、卽ち自己の安寧と、社會の安寧との兩者れ中、前者に比して、後者は遙に高尙有力なりと。實に然り、吾人は必ずしも社會と言はず、之を人類と言ふも可なり、否な之を生物れ安寧と稱するも可なり。要するに愛の者たる、決して之を過重するの弊なし、却て人をして他愛の念を大ならしめ、以て活働的の大に優れるを論ずたる「ベーコン」の所說は、頗る「クリスト」敎が愛を說て、自我主義に淸涼一掬の加味を與へ、以て大に、小厭世の波に捲き去らるゝを防ぐと、頗る相類似す、之の故に自我主義の消極的なるは論を待たず、而も其の濟國的の活働と雖ども、大は卽ち大なりと雖ども、之れ人類の一部に過ぎず。他愛的活働の眞趣。猶ほ壯烈至高の者なくんばあらず。卽ち天外一點の聖光を呼ぶ、我が三界の大導師卽ち之れなり。彼れは普く一切の、人類の上に立ち、以て衆生を濟度せんとす。嗚呼之れ人類以上。至高至仁の摸形にして、詩的英雄の活現にあらずや、「クリスト」然り、「モハメッド」然り、遂に我が釋尊に至ては、最も吾人に接近したる丈け、救世的活働の現化として、吾人に最も極度の理想を示す者にあふずや。試に見よ、苟も身は、一天萬乘の王者たるべき位を捨てゝ、飄然迦比羅の愁雲を顧みず、幾多の難行苦行に、民衆の立脚地を得せしめんが爲め、遂に一切三世の諸佛を念じ、諸天叉魔王に對して層一層の勇敢を發する者、之れ抑も一點諸行無常の大本に打たれ、胸中無限の沈痛は、心に礙するが如く、世界は萬物皆無常にして、有身皆苦を覺り、茲に大乘の大本を悟道す。此時に於ける、此の偉人が社會に對する見地如何。己に世の眞相を觀破し、宇宙の奧底を洞察せゝ彼は、爰ぞ獨り自ふ宜くして自適せんや、混濁せる社會を去て超然たるは、彼のなすに忍びざる所、實に彼は、人間の暗に一導の光明を示し、快刄を揮て世の亂麻を斷たんとす、卽ち暗憺たる思想界の燈明とおりて、大慈大悲の救世主として、人世の運命を孤身疲肩に擔て立てり。卽ち其の福音は、四方萬代に傳はり、萬衆歸仰信願し、世界由て立ち、人民以て安んず。

嗚呼之れ偉大なる救世的事業は、萬古に盡くる事なく、長へに吾人をして、救世的活働厭世の崇高を想見せしむるに非ずや。（自我的及他愛的）、次に前述の厭世思想の大略を圖示せり。



顧れば、苟も偉大なる厭世は、常に人類の上に活働す。其人類が國家たり、部落たるを問はず、人の安寧の爲めに活働す。然るに幾多小厭世は、徒に狹少なる涙痕の限る所とあり、遂に君父を餘處にしても、己の理想に到達せんとし、積薬の累德を妄れて、人民たるの分を等閑にす、亦慨嘆せざるを得んや。而も獨り之のみならず、其最も進歩したる宗教は、皆な其對象の余りに廣くして、國家主義を顧みるに仮あらざる事はなきが、徒らに無常を說き、現世を厭脫せしめば、之れ國家を無視する者にあらざるか。此故に佛者は、轉迷開悟々道の門戸を開くと同時に、五法人事の大道をも忘れざるは、卽ち之が爲めなり。彼の巢父許由は何物ぞや、敢て彼の痴をなし、人之を目して恬淡と稱し、無味と言ふ、成程無意味の事と言はざるべからず。見よ彼の函谷關に一卷を殘して、飄然登仙したりし老子は、其の晩年れ隱遁ありしが爲に、其の出世間的なるを喋々する者ありと雖ども、顧れば一卷五千余字、彼が本領は、委く國家經營の要あり、恬淡無爲とは、決して世を雲烟視せよとの故に非ず。唯其の思想が、余りに厭世的に傾きしが故に、遂に孔子の現實的なるとは面目を異にせしのみ。其の厭世觀裏明かに一導の光明あり、千古悄せず、依然として彼は人類の上に立てり。亦彼れ「キイニック」の短を補したりし「ストア」派は、一面に於ける人生脫却の聲は、他面に於ては人生の責務を忘るゝ事なく、天命に安ずべしと反響す。此故に曰く、國家が要求する所の偉人は、國家的主義を抱懷せる、至言の活働的厭世ならざるべからず。彼等が世を厭ふの念は、世の汚濁を厭ふあり。飜然として之を洗滌して去る者は誰ぞ。彼の濁中に處して汚を悟らざる者は、遂に汚を嫌はざると同時に、之を洗滌するを欲せざるべし。顧れば近時世は益々浮薄にして、厚德の士見るに由なし。人あり罵て曰く、我國は君子なき君子國なりと、噫我輩は茲に希人の心を以て、活働的厭世を鼓吸せんとする者豈偶然なふんや。語に曰く一切の天才は沈鬱なりと、深淵澹たり、淺瀨に當りて細波頻りに淪たる者あり。噫々、朝三暮四、東には唯と言ひ、西には阿と言ふ、其の相去る事幾許ぞ、而も一に追ふべからざる者あり。社會は理てふ惡魔と、現てふ夜叉との掴み合ひなり。人は如何にもして、之が觀客たらんとして煩悶すと雖ども、遂に能はず、茲に社會の序幕は開かるゝあり。茲に人間の形骸は、惡魔と化するあり。嗚呼泣ける者笑へる者、怒れる者、彼等は必竟何等の意味を有せるか。「ロンクフィロー」は歌へり、人生は實在あり眞面目なりと、然らく實在なる此世に處する物、豈一定の標的なかるべけんや。之を捕捉するは、卽人生を解釋するゝ、り。人生の目的果して如何。吾人は徒らに、今日よりも優れる明日を得んが爲めに働く者にあら、、噫々昔「デヲゲネス」は、桶中の聖人として歷山大王れ膽をひしぎぬ。今日鬪爭場裏の運命は、淤に此聖人を學ぶを許さゞるあり。「ストイズム」と云ひ、「イピキュリアン」と云ひ、「タールス」の其昔より、哲學の流今日に盡さずと雖ども、誰か果して之

を永解したる者ぞ。必竟、人世のミゾリーを解釋する者は、ミステリーあり、天光は唯近けり、悔ひ改むべしとは眞なりや。塵あるが故に塵に返るとは、須ふく世を無視して、彼岸に急潛せよとの謂なる乎。目的は彼岸にありとするも、猶ほ斯く容易に放擲し得る程に、人生をは無意味なりとは信せぬなり。然れど、所謂無上可能の世界が、實現せらるゝ迄は、遂に無意義にして、人生れ目的は論斷し得る者にあらず。宜し論斷し得るとするも、其は遂に達し得らるゝ者にあらざるべし。吾人々生の價値を疑ふや是に日あり。猶孤兒の乳房を探て泣くが如く、永く五里霧中に彷徨せざるべからざる乎。社會の進歩は信せざるにあらずと雖ども、其の朧ろ氣れ思想は、以て吾人に滿足を得せしむる者にあらず。如此、目的は中々に得られず、忽焉として茲に厭世の萌芽發す。嗚呼厭世、之れ果して軟弱なりや、樂天果して健全なりや、原と此問題たるや、あゆる繫累を脱却したる思想に於てのみ、論ずべき處にして、吾人が社會に處するに當りては、將に其の、斯く悲痛慘膽は、世故の常態なるを知りつゝも、敢て之に制せられざるふん樣にと、處世の好方便を擇ばざるべからざる者あり。我此の理を悟らず、徒らに浮世の幻迷を辿りて、果敢なき自己の閲歴を迴顧すれば、今更に繰り返す過去日記れ頁が、委く悲哀の黑雲に封ぜられたるを見ては、豆の如き心臟は、唯破裂せんとす、然りとては余りに老婆的なり、我聞浮屠敎、中有解脱門、置心爲止水、視身如浮雲、抖擻垢穢衣、度脱生死輪、……とは、樂天が歌ひし自覺の吟なり。我れ一夜飜然として、浮世れ眼鏡を洗へば、雲霧忽ち晴れて、山月清く一導れ星光、悠に希望の道を照せり。嗚呼世はなまなかに闇にもあらざりけりと、悟りし我は迷へる我にして、世は永劫に太古れ夢にてあれよかしと。

（終）

加越獨遊

石田黑子軒

金風颯々稻田に戰くれ秋英魂を四條畷畔に吊し霹靂一聲黑雨山を翻すの夏金鋼山巔に古戰場を探り月瀨芳野梅櫻爛熳たる處奚囊を充たし金殿玉樓は則ち談山湊川の兩廟に拜し白砂青松は須磨明石の雙浦に眺め健脚殆ど近畿の勝を蹈盡せざるはなし由來放浪の身金城に客となる三年屢白岳登山を企てゝ成らず立山蹈嶽の企友に圖りて亦退けられ沈鬱落魄書齋に健脚を撫して嘆する者再三其の烟霞れ癖其の鬱勃の氣迸發して加越獨遊となり尾山城頭朦朧たる春月に袂を分ち兼六園畔續紛たる櫻花に名殘を留めて神武佳節の早曉一笠一筇一枝の筆を携へ莫座に身を固めて漂然南天に向ふ想起も客歲斯の佳節を期し鳩園を拉して北天倶利伽羅戰場を吊し山嶺春雨漸瀝春風蕭颯恰も千軍萬馬の歌かと訝らる處我亦平生愛遠遊。登臨此日快吟眸。躑躅滿山留戰血。芭蕉殘碣仰風流。危路凄煙人跡絶。長天猛雨鳥飛愁。無端惹起興亡恨。四月陰雲似暮秋。と去歲の壯遊を思起し獨遊の此行を自ら壯にす今や曉風習々面を拂ふと雖も四月陰雲似暮秋の慘憺荒涼の景絶にて無く麥隴菜圃水田の間に點綴し青黃相映ず一路松任に通ず旭旗檐端に翻りて店舗淸潔亦慰ふべし乃ち一枝の梅一包の餅を購ひ千代尼の墓に手向く墓は　寺内にあり香烟斷續の處苦碑を認む辭世の句あり

月もみで我は此世をかゝくかな

聞く千代尼は徒に古人の糟粕を嘗めず物に觸れ情に感ずて錦心繡腸を晒らし自家獨得の機軸を發

輝して俳偕壇上に一新生面を開けりと架上の千代全集は常に尼が姿容を眼前に髣髴たらしむ貫ひ水の句は其の人となりの風流を想起すに足るべく蚊帳の廣哉の句は亡夫を慕ふ千代女の風采を描くに足る蜻蛉釣の句を讀んで誰か潛然たらざらん叩かれて裸で起る雪の竹の一詠を見て誰か其の當意即妙の詩才を驚かざらんや尼を慕ふの情纒綿縷々僅かに名殘を一詩に留めて去る

會欽詞藻獨超倫　吊來如今感慨頻　薫墓香煙多斷續　彫碑名句極清新
非唯一笠風流客　又是三衣貞節人　彼此追懷不忍去　清泉一掬薦青蘋

宮保平和を過ぎ美川に到る傳聞く斯地神社祭典の通宵握乳捕裙の淫風醜體男女れ間に行はるゝと街衢の清潔は松任に一籌を輸すと雖も風景言はん方なく手取川滚々遠く流れて碧瑠璃の如く河畔楊柳低く枝を垂れて翠陰婆娑たり橋上立て遙に眸を放てば白嶽巒峯として九天に冲し北海渺漫として怒濤岸を嚙む烟雲杳冥の間翠黛糢糊として蛾眉舞ふが如き者は是れ雙嶽なり白鷗點々波間に浮沈するが如き者は是れ舳艫の帆影に非ずや歩々山水の美を眺め或は道を問ひ或は茶を喫し小松に到る市廛鱗次輪蹄絡繹亦一都會なり古の城墟は突兀として半天に聳ゑ高甍巨棟の壯觀見る能はずと雖も雉堞壕壍の稍古の俤を存するあり此地を經過すれば無窮の事一望凄然興癈を感ずと懷古の情を浮べて桑滄れ感誰ゝ無からん忽忙茶亭に食して西す水田渺茫一路蜿蜒蜿の如く安宅に通ず海岸松樹鬱葱々たる處一祠あり住吉神社と云ふ入て古蹟を問ふ蟬鬢蛾眉玉を欺くの美人羞を含みて源將軍が當年の沈淪轗軻の艱辨慶が怜悧敏捷の才を說き去り眼を拭ふて辨慶が遺物と覺ぼーきて二間許れ長稽薙刀を示し社後遙望の臺に導き纖手西天を指し怒濤碎け水煙漲る處是れ所謂安宅

の關今や見る影もなく吊客をして空しく桑滄の嘆を擁かしむるのみと鞭撻縱横淚點斑。不知吾主解愁顏。若敎毛氏無賓客。安得詐逃函谷關。と數年前魂茲に飛んで夢想せし所嗚呼斯の如きの毛氏今や何邊に在る鷄鳴果して聞くを得べきか今昔の感制し難く問はんと欲して口吃し歩まんと欲して踏躇す慇懃辭し去りて海岸に沿ふて直に篠原に向はんとせしも黄犬の人を嚙むあり果さず再び小松に入り滊笛一聲動橋に着し右折歩して片山津に向ひ投宿す斯地青松一帶の砂丘を背にし柴山潟に臨み景幽邃にして絶雅温泉を以て著はる浴槽廣くして深く立てども肩を越せり浴し畢りて一醉旅情を慰む室を隔てゝ管絃絲竹鄙歌俗謠相混ーて喧囂耳を劈く壁間烏鳩山更幽の句あるを見るや倏ち聒ひ幽を慕ふの情切あり乃ち舊手を雇ひ柴山潟に棹す片月西山に懸りて清影水底に印し長天一碧水より青く水天より綠に月舟に在るか舟天に在るか恍乎として羽化登僊の想あり漁火明滅の間を棹し漸く中流に到れば管絃絲竹の聲微かに聞え先の喧囂却りて幽邃の興を添ふるに似たり漸く進み青松一帶の沙丘に近けば萬籟寂として聲なく一鳥不鳴山更幽なり暫くして怪禽一鳴一鳥不鳴の幽邃を攪し去りて閑寂言はん方なー鳥鳴山更幽とは蓋し之の謂か月西山に沈みて冷露衣袂を霑す乃ち辭ー宿に歸り褥に就く夢魂猶ほ舟中に在るが如し翌朝曉起入湯す湯清く爽氣肌骨に沁す午刻一醉に乘じ柴山潟に沿ふて篠原に向ふ想起す當年戰士林の如く旌旗雲を捲て喊聲四面に起り旭將軍馬上策を畫して雄心落々たり實盛雄姿矍鑠たりと雖も老憊爭か壯士を凌ぐを得ん千載れ恨を呑んで篠原々頭の露と消も然りと雖も一死鋏鎗に衂めるを期し鬢髮染めて沙場に向ふ老臂の勇豈偉ならずや旭將軍壯なりと雖も粟津原上一敗聯逝のず聯逝かず湖南三尺無情の土と空

しく化す嗚呼勝敗は兵士の常盛衰は世の習豈獨老臂の敗を悲まんや柴山潟の沿岸青松一帶れ下洗髪池を認む相去る數町懸首松あり蟠根露れて老幹偃蹇たり行十數町白沙青松の處土丘あり丘上老松鬱葱圍むに竹柵を以てす是卽ち實盛の墓なり瞑目墓前に額けば柴山の濤聲松濤に和して暗唖叱咤の聲に似たり低頭沈思愴然として去る能はず輙ち苔碑を掃ふて水を灑き懷古の詩を手向けて去る、

鬢髮染成壯士姿　如何老憊力難支　山巔唯見懸頭樹　田畔空餘洗髮池
墓色蒼茫迷壞塚　苔花剝落認殘碑　我今一盞無由酹　駐馬聊題懷古詩

夕陽西山に呑ひ晩風濤聲を吹き歸鳥閃々前山に入る宿に歸り晩餐喫し畢りて楸枰數局に一夜の閑を消し翌朝八時動橋に向ひ生龍山篠生寺に詣で蓮如上人六十一歳の眞影を拜し粽篠の青々たるを眺めて粽石の由來を問ひ右折那谷寺に向ふ斯寺は泰澄大師の開基に係り花山天皇落飾して鳳輦止め給ひし處滿山一石より成り一條の坦途深く通じ一個の巨巖渾然として水光淡々たる蓮塘に臨む高數丈横披して丘陵の如く巖面皎潔にして峻峭殆んど攀ぢ難し巖頂に生ひたる樹は骨瘦せて皮緊く枝亦疎なり巖石の纔かに窟陷する處佛像を寘き平坦ある處小龕を安す而して大悲閣は斷崖削成の下に在り構造堅緻にして嘗て傾杞せず楹丹せず欄間の彫刻は古雅精妙花樹鳥獸皆眞に逼る或は左甚五郎の作と傳ふ正に是宛然空中の樓閣なり閣に抵る石階あり階委く巖を刈りて造る登れば眼界廣濶羽化登僊れ趣あり殊に秋高く月清なる夕は石白くして樹逾蒼く

石山の石より白し秋れ風　芭蕉

攀たればはや雪散や那谷の石　木雄

美しきけしきや雪の晴れあかり　青坡

碑面の名句對誦せば趣味津々たり道を隔て丶丘陵あり巨巖と相對し喬木挿攝綠苔徑に滿ち巉岩起伏細流其間を縫ふ羊腸たる綫路其間を縈回し櫻花爛熳たる楓葉の絢燦たる新綠の濃うある積雪の清らかなる身一度斯境に入れば四時の雅景夢想するに足る其山は秀麗明媚其巖は嵯峨峯嶂たり綺樹瑤木は其間に掩映し碧松丹楓は其阿に雜捶す詩佛が大士山中霜染楓。怪岩奇石錦屏中。西風不似山僧懶。吹拂宮前滿地紅。の句を誦せば楓葉花の如く樹々紅の光景眼前に髣髴たり

奇石怪巖如臥龍　大悲靈閣聳危峰　五郎彫刻見眞跡　蕉叟風流留舊蹤
一帶櫻花欺雪白　滿山楓葉待霜濃　四時風物看無厭　便是加州山水宗

一詩を賦し門を敲て寺寶を觀る一箏の琴精巧麗美にして馬符は古雅愛すべし辭し去り茶亭に憩ふ時十一時花山法皇の遺蹟を尋ねんとして菩提村に向ふ十數町陵は一小丘にして形梵鐘の如く圍むに石を以てし老樹鬱葱傳て花山法皇の陵と云顧ふに列聖の山陵儼として祭儀具り獨此陵荒廢して祀ふず老樹愁色を帶び春鳥恨を說くに似たり花山神社あり四驅れ木像を安して腐蝕多く自ら僧形をなす御座の石三湖臺皆其遺蹟なり拜し畢り山代に向ひ投宿す湯泉澄清皎潔片山津れ比に非ず一浴爽氣肌骨に沁し俗腸洗ひ去りて詩魂益清爽乃ち山代公園綠葱々たる畔悠然吟杖の之くに縱す羊腸たる山路險ならず坦おふず石佛到處に點在し宛然世紛を隔て丶佛界に在るが如し登盡すれば眺望廣濶碧波萬頃渺茫際なく白帆縹渺隱見出沒する者は柴山潟なり滚々たる一條の水流蛟龍れ地に

蟠る如き者は大聖寺川あり連山殘雪を留めて起伏する處一嶽崒聳九天に聳ゆる者は白岳に非ずや左顧右眄應接に遑あらず滿眼風光看て盡きず一身遂に白雲と閑なり割愛宿に歸り寢に就く夢に圓頂黑衣の淸僧來り曰く淸淨の流に汲んで僊佛の妙境に嘯き一介凡夫れ身を以て古聖佛哲に親炙し高僧の垂跡を吊す人世の淸雅豈に之より淸に之より雅なる者あらんや玆を去る四五里吉崎御坊あり蓮如上人れ遺蹟なり往き紅塵の俗腸を洗ひて心所の妙理を硏め煩惱の苦を轉じて涅槃の悟を開けと夢醒むれば枕頭八時を報ず乃ち旅裝を整へ大聖寺を經て吉崎に向ふ路傍釋入西俗名與市れ碑あり香花一辨茶亭に求め手向けて吉崎御坊に着す　蓮如上人開基れ舊寺にして下間法眼朝倉經景れ戰の際燒失し今の堂宇は再建に係ると云ふ先づ本堂に入り香煙模糊たる處に大悲の尊像を拜し上人の眞影に額けば身當年に在りて親しく佛恩に浴するが如し藏する所の肉着の面一に嫁威の面と云ふ在昔一悍婆あり嫁れ甚佛を信ずて上人に歸依するを惡み百方之を妨げんとし終に傳家の面を被り鬼裝道に要して之を脅せり而も嫁自若念佛を唱し顧みずして去る婆悄然として歸り裝を解のんとせば面堅く肉に着して脫せず愕然深く懺悔し上人の許に赴き罪を謝し一度竺語を唱ふれば面忽焉として落ちたり此面卽ち是あり均しく之れ人なり婆は其心蛇蝎の如く嫁は其心菩薩れ如く一場の演戲をなして佛の偉德を顯はす其技一なり今や彼何邊にかある紫雲靉靆く處一味同體蓮臺に手を聯ぬるや必せり堂後石階を攀ぢ吉崎山頂に登り獨り怪む一偉僧が墓を吊する者あきを偉僧名は本向坊了顯と云ふ上人の弟子なり嘗て吉崎御坊の燒くるや猛火の內に馳せて親鸞の遺書を求め其遁るゝ能はざるに及び割腹書を藏めて火中に死せり眞宗の寶典敎行信證は爲に泯びざるを得たり嗚呼其節紀信の忠に劣らず假令身浮屠に屬すと雖も頗る欽すべき者あり御花松腰掛石は皆上人の遺蹟なり全山松樹鬱々として碧波渺茫たる吉崎浦に臨み森林一叢輪形なせる鹿島神社に面す上人嘗て歌あり

鹿島森烏のむらのりけるを見て

かしま山宿るからすの聲きけばけふもくれぬとつげ渡るふん

濱坂山のあなたに浪のうつ音を聞き給ひて

濱坂の山のあなたにうつ波の夢おどろかす法の聲かな

信心の心をよみて

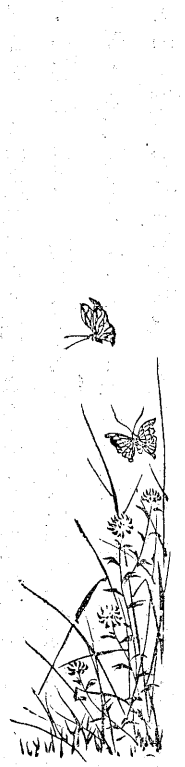
信心はたゞ一すぢのまるきばしよそめをすれば危かりけり

人情變遷口碑滅し易く桑滄の變あるを恐れ記し以て世人に諗ぐ細呂木を經て金津に出で鋏車に乘ず福井に着す午後三時想起す去秋藤島神社に詣で奮然拔劍海中投。擊破幾千匪畦雛。大節當年名蓋世。精忠今日跡猶留。英雄逝去魂無返。孤客吊來淚自流。無限悲風吹颯々。啼鴉落木舊祠秋。今や春陽駘蕩花明柳暗の天參拜すれば自ら異樣の感あり所藏の寶物拜觀を請ひ去りて景岳先生の墓に謁す墓は市の郊端妙法寺の傍に在り渺たる一小碑高僅に三尺に過ぎず兩親の墓間に介す繞らすに石柵を以てし方總て二間稚松未ざ枝を延すに到らず香火永く絕ゆ來吊越前志士塋。苔碑讀去日將傾。傷時夙結排奸黨。憂國曾爲攘虜盟。慘憺苦心那變志。呻吟揮淚暗春聲。秋風似訴當年恨。瑟々墓邊樹上鳴。と去秋英魂を吊して徘徊去るに忍びず敬慕れ餘今春路次又香花一辨淸水一掬墓

前に奠す靈若し知るあらば髣髴來り饗せよ嗚呼先生稀世の英才を抱て幕末多難の際に生き盛に勤王の大義を發舒せんとして時利あらず雖逝かず宿志蹉跎し積謀跌躓し恨を呑んで小塚原頭の露と消ゆ先生牢中手づから註する所の資治通鑑今何にある二十六年夢裡過。顧思平昔感滋多。天祥大節嘗心拆。土室猶吟正氣歌。れ句を一吟すれば囹圄楚囚の酷遇慘況歴々見るが如く悚然惻然同情の涙潸々瞼蓋を傳ふて落つるを禁ずる能はず由來志士多く蓬蒿に困み世と遇はず英雄の末路甚崎嶇慘憺を極めて打雨晩風恨み長へに盡きざる者比々皆然り焉ぞ獨り之を先生の孤操に悲まん功名場裡歸然夙に抽んで、維新風雲の先鞭を擧げ身を拋て先づ國難に殉ず徐に奏功を後人に俟ちしも、の事遂げず雄志酬ひずして刑辟に就くも固より其志あり然るを矧んや其英風を欽慕し其宏圖を繼紹するれ士彬々輩出し雲蒸龍變雨を呼ひ雲を起し縱横書策善く中興の鴻業を濟して世潮茲に革新し風物頓に霽收して天日麗々皇基盛德萬古芙嶽の皓雪と俱に瀛ふさるに臻りしは先生の献身盡瘁亦與りて力あり然れば英魂應に快く千年の長眠を靖ずるに足る者あらん余幼時先生の啓發錄黎園遺艸を讀み常に感憤の心を起せしもの今墓前に低頭沈吟愴然として俄に去るに忍びず輙ち蘚苔を洗ふて水を灑き吊向揖哭覺えず刻を移して起ち墓草萋々たる處名殘を留めて停車場前の茶亭に投宿し翌朝曉起鋏車に投して金城に向ふ群山突兀川流丿丶夢裡に過く

瀛笛聲高風拂煙。行程百里瞬時遷。奇工亦有詩人恨。窓外風光不入篇。

瀛笛一聲金澤驛に着す尾山城頭の櫻花は余が歸を迎ふるに似さり觀賞須臾家に歸れば午刻を過ぐ古人云山水の佳景人の才を助け人の奇を發すと此遊果して然るか否や姑く記して他日れ參考に供す



文苑

武夫の華（脚本）

原著レッシング氏「ミンナ、フォン、バアンヘルム」　久摩志呂古宇譯

中の一節

宿屋の段

退職陸軍大佐　テルハイム
テルハイム氏從僕　ユースト
騎兵佐官マルロッフ未亡人

壹　齣

テルハイム、　どうせこの支拂は延引せねばならず最早有金とては鐚一文この懐にはなしと云つて此際でどうこうする事もならず

ユースト　エ、　錢一文も御座りませぬとイーハテ先刻此屋の主人が旦那樣の御机の内で拜見いたしまーたあの五百圓の小判の御紙入はありやどう遊ばしました

テルハイム　ムヽ、　あれは此方が他人(ヒト)のふ頼まれて預つて居る金子

ユースト　したが旦那樣、旦那樣はアノ一月程前にイヤモウ一月半ゑもなりますか舊の騎兵大尉が札で百枚持て參りは致しませぬんだか

テルハイム　オヽサ　其方が申あの金こそポールウエルネルが持て參つた五百圓　ーたが其がどういたした

ユースト　ハヽー　そんならあのお金は未だに手をおつけ遊バしませなんだか　イヤ旦那樣ありや旦那樣の御好お通り御使なされてよろーう御座ります　ナニ此ユーストが御請合申ます

テルハイム　何と申あの金を勝手に使用いたせとは其りや眞實(マコト)ゥ

ユースト　ウエルネルは陸軍會計課が旦那樣の御請求を未だに取上げもせずとやかうと愚圖愚圖いたーて居りまする事は此私から聞てよう存ド て居りまする　ーて又其上に……

テルハイム　ア、イヤ其方が其事まで話したとあるからには此身共が今はともあれやがては非人乞食の其苦みを受くる事まで……アヽユースト其方は餘計お事まで云つてのけてくれたあァされば こそあの不憫なウエルネルは多くもあふぬ財産(タカラ)をば身共にまで分けさして……然ゑマア今そうと知つたが何よりの事　コリヤ「ユースト」今其方に申聞ける事があるサア

たッた今迄働てくれた給金の勘定書を出ーてくれ　今より其方とは主從の縁は――切つたぞよ

ユースト　エッ　其は　ナヽなんと仰せふれまする

テルハイム　シーッ　誰やら參つた樣である

貳　齣

喪服をつけたる女一人入り來る兩人思がけおいと云ふ樣子あつて

女　眞平御免下さりませ

テルハイム　アイヤ　女の衆　そなたは誰に御用ばーし御座つてこヽへは參ふれしぞ

女　イエ　そなた樣にでも御座りませぬ　そう仰せふるヽあなた樣へ――もう御見忘れ下さりまーたか　私はもとあなた樣の御下役で居りまーた騎兵少佐の寡婦(ヤモメ)で御座ります

テルハイム　ヤヽナント　ムヽ忘れも致さぬ「マルロッフ」氏の御内儀殿移りやすき世の中とは云へ扨々御變りなされた事ドやなア

女　ハイ難有御座ります　夫がおくありましてのふドッと床につきましてこの頃やうやう床を離れまーた計り　してマアこの樣に朝早く伺ひまして定めて御迷惑で居らせられましょう然し私も旅に出まする身の上　旅と申まーても實は私同樣に夫には死に別れ果おい暮しをーて居りまするものが親切にも一ーよに暮そうおどにやつて參れと申ます　其故唯今ろふ其方へ參る處で御座ります

「テルハイム」「ユースト」に眼くばせして

テルハイム　「ユースト」用事があつたら手をたゝくであらう先づ其までは

ユースト　ハヽ　次の御室で

テルハイム　ムヽ

ユースト　御用のあるのを待て居りましよう

「ユースト」挨拶して出でゝ行く

參齣

「テルハイム」膝おしすゝめ

テルハイム　サア御内儀殿　御覽の通り人も拂ひ申たもう此上は御心置なう　身共の前では御遠慮御無用何もかも御かくしなさらず御話下され　御力にある事も御座らば隨分ともに此身共が……

マルロッフ妻　いつもながら難有い御やさしいあある樣の御芳志

テルハイム　イヤ何とも御氣れ毒ある今の御身の上　さゝ御用れ筋と仰あるは　誠にそあたの夫「マルロッフ」殿とは此「テルハイム」の偏屈者も兄弟も及ばぬ間柄

マルロッフ妻　ホンにあなた樣とは一方ならぬ友達中で御座りました事は私なぞ能う存ド て居るものは御座りませぬ夫が臨終の枕邊にたつた一人の子供や此私が御座りませあんだあらきつとあある樣の事を思ひ出しあなた樣の御名前を呼びながら眼を睡りましたに相違御座りませぬ

テルハイム　アイヤ御内儀殿　其御話丈けはもう御止め下されィ　思ひ出すも涙の種　とは云ひながらこの朝は泣くに泣られぬ……（胸一バイの思入あり又思ひかへしたる風姿あつて）イヤ御内儀殿唯今はさる次第御座つて今は何と神も佛もない世のと思ひ餘つて居る所への御來訪（コシ）　其につけても「マルロッフ」殿は正直一圖の御方で御座つたワイ　サアサ御内儀殿御遠慮はいふぬ事身共にのなふ用事御座らば何ありとも仰下されい

マルロッフ妻　イヽエ　ナア　難有う御座ります　實は夫が最後（イマハ）のさはに申殘して置ました事致しとげませんでは此旅にも出られませぬ始末　外の事でも御座りませぬ夫が生て居りまする内あある樣から御金を拜借致しましたとやら其故夫が死にましたあと若し御金ゞ手にはいる事があつたら先何は拂置き第一番にあある樣へ御返し申てくれと申ました　此度家をたゝみまするにつき夫の紀念（カタミ）の軍服やら何やらのやふ賣拂ひ少しばかりのお金が手に入りましたのら何卒さし上置ました証文と御引替を願ひたいので御座ります

テルハイム　何と仰せふるゝ　然らば其故にわざ〳〵身共を御訪ね下されたとな

マルロッフ妻　ハイ其故御邪間に出でました　何卒御金を御しふべ下さりませ

テルハイム　イヤ御内儀殿　身共が「マルロッフ」殿に金子御用立申たとな　そんな事は御座らぬ筈ハテ扨むつゝしき御話　然しマア一應はしらべても見るで御座ろう

手控出してくりひろげあちこち見とうす　遂に見あたらぬと云ふ身振

あつて

唯今しらべては見ましたあれど一向さる書付は御座らぬが

マルロッフ妻　ヘエ　其では何れへか御しまい忘れ遊ばしたのでは御座りませぬか……イエ何も証文がどうこう申のでは御座りませぬ御借申た御金丈はどうか御納め……

テルハイム　ア　イヤ御内儀殿身共はかゝる品置忘れる樣な事は御座ふぬて　其証文のないのが御用立申た事のない　よし又一度は御用立申たにしろ最早御返し召れた何よりの証據

マルロッフ妻　と仰せられましても

テルハイム　イヤ何　確で御座る御内儀殿「マルロッフ」殿は身共のふ何も借用召されては御座ふぬ身共でも一向に御用立申た覺は御座らぬで　イヤ其のみの其借と申は身共の方にこそ澤山御座る筈　そなたの夫「マルロッフ」殿には指折數ふれば　オヽソレ　六年と云ふ永の月日善さにまれ惡さにまれ憂き困難を共になし下されたに未だ何れ御報酬(ムクヒ)も出來のねたる次第　して「マルロッフ」殿には一人の御子の御座つた事は決して忘れは致さぬ「マルロッフ」殿れ御子とあるうらには身共も他人(ヒト)の子とは思ひ申さぬとくにも引取御世話申筈で御座るに何を申せ今の身の上　扨儘ならぬ浮世ドやな

マルロッフ妻　誠に御情深いあなた樣其御慈悲は誠に難有うは御座りますれど落ぶれましても「マルロッフ」の妻私の心の中も御察し下さりませ私の氣の濟みまする樣此御金計りはどうか御納め下さりませ

テルハイム　ハテ扨御合点のわるい　斯樣申某が御用立申た事がないと申ほど確な事は御座らぬに其にてもそなたの御氣が濟ませぬかたつて受取れと仰あるは此身共に御用立申た事のない金をしかも親しき友が後日殘した孤兒うら非道にも盗めとれ御心の

マルロッフ妻　サアそんな事は

テルハイム　覺えの無い金請取申てはよもや盗でないとは申されますまい

マルロッフ妻

テルハイム　サア〳〵　其金子は御内儀殿御子息れ物で御座る御子息の爲に御しまい置召されよ

マルロッフ妻　ハヽハイ　難有う御座ります　あなた樣の御芳志(ゴロザシ)　イヤモウ　能う分りまして御座ります何と御禮を申上げてよろしいやら身にしみてお嬉しう御座ります　誠に行屆きませぬ淺果な女の一徹にエライ失禮致しましたどうぞ御免し下さりませ　ホンニマア　猛き計りが武夫でないとは承りましたか　どうしてこの樣にあなた樣には燒野の雉子夜れ鶴とやら子を思ふ母の思を御察し下さりましたら　とんだ御邪間を致しました難有う御座ります　では私はもうこれで御暇致します

テルハイム　然らば御内儀殿御道中は隨分ともに御身体(カラダ)を御いとひ召され……したが此後暫くは御音信(タヨリ)御無用にあし下されィ　斯樣なる事申は異なる事なれど御覽の如き今のテルハイム思ふ計りで萬分の一も御力になり得ない云ひ甲斐のなき身の上故どうのこゝ暫くは……イヤ大切なる事忘れ申たも一つ申て置く事が御座る　「マルロッフ」殿は舊の聯隊會計より御

請取めさるゝ金が御座る其御請求 決して條理(スヂ)おき儀では御座らぬ　斯く申身共にも下附ある事あれば「マルロッフ」殿にも御沙汰ある筈其に就ては此身共が如何樣にも證人になり申で御座らう

「マルロッフ」妻　かへす〳〵も難有うは御座りますれど私はもう何も申出てますまいあなた樣の御情深い事は御志だけでも神樣や佛樣には能う分つて居りまする神樣とても御感ど遊ばしましよう私はもう涙が出まする計りで御座ります

禮云つて立去る

四　齣

テルハイム　扨々けなげな不憫な女じやなア　オヽさうドや此證文取棄て置うねはおらぬワイ

（手控の内より證文取出し引さく）　弓矢八幡上覽あれ　よしや此身は赤貧食ふに食なくとも古證文に口きうす如き斯る心は寸分御座らぬ

五　齣

テルハイム「ユースト」さうぢやないう

ユースト　ハイ〳〵（眼をこすり〳〵）

テルハイム　そちや泣たな

ユースト　イエ唯今御給金書御臺所で認めましたこのイヤ御臺所はきつい煙で御座りました（泣たるをまぎらす風あつて）　ハイ旦那樣是で御座ります

テルハイム　ムヽこちへ

ユースト　旦那樣御慈悲で御座りますいくふ世間が旦那樣へつれなく致しましても私にはどうろ

テルハイム　そちや何と申す

ユースト　いやもう旦那樣　私は旦那樣に御分れ申位おらいつそ死にたう御座ります

テルハイム　一應は尤おれど身共も今の身の上で下男(シモベ)でもあるまい自らが取賄はねばおるまいに最早今迄通り召使つて置くわけにもいうぬて

（と給金書打投げ讀み下す）

覺

旦那樣より頂戴の分

一金二十一圓也　三ヶ月半給金

但月六圓の事

一金一圓也　初月分雜用御取替の分

〆金二十二圓也

テルハイム　ムヽよし　然し本月は半月おれど一月分遣はさう

ユースト　イヤ旦那樣　まだ裏に御座ります

テルハイム　まだあるとな（裏かへし讀み下す）

ユースト拜借の分

一金二十五圓也　外科醫へ支拂金
一金三十九圓也　病氣全快まで看護人へ
一金五十圓也　兵火に罹り盜難の折父へ
但拜領の馬匹二頭の代を除く

〆金百十四圓也

貸借差引金九十二圓借

テルハイム　コリヤ馬鹿な事　そぢや狂氣おいたしたの

ユースト　イエおう〳〵まだ〳〵御返し申ますのも澤山御座りますおれど書きたてましたとて餘計お紙が費る計りとても御返し申まする事も出來ませず何一つ是と申て御役にもたちました事も御座りませずすれば頂戴いたしました御仕着も着て居られる義理でも御座りませぬ……こんお事におります位おらいつそあの病氣の折に病院の内で死でーまいました方が餘つ程よろしう御座りました

テルハイム　そちや何と心得てか　そちが此方に何も借のある事はおし　して又そちも此身共の樣お主甲斐のなき者に仕へるよりもつとそちの幸福（シアワセ）にお身共が知合の善い主人を世話して遣はさうと思ふのじや

ユースト　イヤもつたいない旦那樣其爲で御座りますかイヤ私が此上旦那樣ら頂戴いたすものがあふう譯が御座りませぬ私こそ澤山の御借を致して居りまする次第其故御暇を下さふず御側に御置下されて　ぶつなとたゝくなと御好お樣にして御使なされて下さりませ私はどこまでも御側に居りまするイヤ離れる事はどうしても出來ませぬワイ

テルハイム　イヤおゝな頑固者めが　そちや何も云へおい者と思へば勝手氣儘な無理を云ひのける性わるメ

ユースト　イエ何となりとも御好な通りおつしやりませしたら私はまだ〳〵私の犬より劣りました性根は持ちませぬ積りで御座ります　マア御聞き下さりませ此冬の黄昏（タヅガレ）時で御座りました溝の方へ參りまするとなにやら鳴て居る聲が聞えまするハテナと思ひまーて段々降りて參り嗚呼此寒空に何處の里の人鬼ゞ腹を痛めた生の子を無慈悲にも棄てたのであらふかと暮合の其と能くも分りませぬかふ聲をめあてにさぐりあて引上げまするとと河の中から小犬が出て參りました赤子と思ひましたに犬の子で御座りましたが然しマア凍て泣て居たのを援けてやつてようつたと然し私は犬が好で御座りませんでしたから其儘あちらへ參らふと思ひますと其犬の子ゞ振へ〳〵私の後へついて參りました追ましても追ましてもやつぱりフン〳〵とついて參りまーてしまいには打ちたゝきもいたしましたがどうしてもあちらへは參りませぬ私は夜におりましても家の中へ入れてやるでもなしするとは入り口の閾の上に寢て居りますして側へさへ寄つて參れば足で蹴まするのら　キャン〳〵鳴きますが矢ッ張私の方を見上げまして尾を振つて居なしたと申ましてもまだ手から一盃の飯もやりませ

ん其であるのに可愛相ドや御座りませんか私計りをたよりに致しまして なついて居り私の後先にまつはり歩いて敎へもせぬにチン〳〵お廻り　して其犬と申まするは誠に不格好な犬では御座りますが中々以て素直な良い奴で御座ります　ナントマア私もモト〳〵犬は嫌で御座りましたがコウもつきまとつて慕つて參りますと邪見にする事も出來ませぬ

テルハイム　（獨り言）　扨々よう似た話（イヤ世には棄る神があれば援る神もある）情愛は人畜のはらぬものじやおア

コリヤ「ユースト」もう分れることはよそうワイ

ユースト　エヽモウ知れた事で御座ります旦樣那は御召使がおくて御用が辨じますと思召で御座りますかい瘡と御受け遊ばした事を御忘れ遊ばしましたか　たつた片腕より御座りませぬせ　御召物とて御一人では御着替へ遊バす事も出來ず私如きものもどうでおくてはならぬ下郎　シテ又私が居りませんでは旦那樣が御安心もおりませずつまらぬ下郎では御座りますが月になら雲花には嵐まゝにならぬは浮世れ常と申ませば此上にも不幸の上に不幸のふりかゝつて參りましても旦那樣の御爲とあらバ乞食は愚の盜みでも……ムヽイヤナニマア致す位に心得て居まするもの

テルハイム　アヽコレ「ユースト」すぐえらそうにつべこべと召使ふては置かぬぞよ

ユースト　ハヽア』

（終）

漁村の浦波

夢現生

寄せてはかへす太平洋の雄波雌波の響を、長へに耳にして心長閑のに住みなせる漁村あり、松杉の翠いと深く生ひ茂れる亂丘は、其うしろを環り、右に一港を望みて白砂斜めに走れり、

韆韆たる濤聲に夢を破られて、朝まだきより渚近く歩み行けバ、殘星數点光淡く、浦風習々として衣袂を拂ひ、遠近の苫屋より朝けたく煙靜に立ち昇り、鎭守の森に曉告ぐる鴉の聲いとさわがし、

里人の往け通ひしけく、籃など携へて節面白く鄙歌うたひて、女の群れ〳〵、いそもの漁らんとてあゝかうしとの磯邊傳ひ渡り行く、うこぞもの罵り騷ぎ、櫓聲楫音勇しく、幾艘とおく漁舟乘り出すなど何となく心地よげに、船歌の聲も幽かに朝霧の裡にきこえずおりぬ、

深かりし朝霧名殘なくはれゆけば、大島小島などかすかに見ゆ初めて、山色紫おる中を、數点の白帆いかおたこおたに去來し、波間には折々白鷗の群れたちたるなど、其風情えもいはず、近き渚遠き岩の根には網引く翁、稚子背うて釣り垂るゝ童おり、其閑かなるさま、洵に塵の世を離れたり、

數張れ干網棹の頭に高く掲げられて公孫樹葉の如くなるを、覺束なくも照したる入日の影、すでにうしろの杉むらに消ゆれば、夕べを告ぐる鐘れ聲、曲浦に響き渡りていと靜かなり、

さやけき月の波にむすほれつゝ、右の方より差し登れば、漁火いくつとなく見え隱れして、幽かに聞えし櫓聲も稍やく近く、黃金の如き疊波を縫ふて渚につけば、女ども籃重げに荷ひて、

獲物は多寡を語ひつゝ、おのがじゞ家路に向ひ行く、留守居は媼童は今や燈火を點ド、一家團居して夕餐なしゝ笑ひさゞめく、漁夫は其腕を撫てゝ、今日はてがらを誇りつゝ妻子に語らふ。

九時頃になれば、大かた寢つくして家内いとゞ寂のあり、只渚うつ波音いよ〳〵高まり、皎々たる明月空しく大海原を照し、冲は汐風徒らに磯馴の松ゝ枝に颯々たり、

新体詩

磯邊の花

ぼく

殘んの月ははや落ちて
暫しは闇の世とおりぬ
人はあやしき夢を見て
海べら遠くのみ居ます。

世はとことはの樣とめて
山は靜におぼろおり
海とも分ゝぬ海の上に
太古の闇の姿あり。

靜かに歌へさゞふなみ
のなづる小琴亂れては
たゞきしふべに海神(わだつみ)の
ゆめ驚かすことなかれ。

世のなり出でゝ朝たより
笑(えみ)と憂(うれひ)のさだめとて
夜と晝との境おる
くしきや何の光ぞも。

紫にほふ雲立ちて
空や海なる冲路より
晝をのせくる大鷲の
羽風に白ふむ朝ぼらけ。

郎がて夢ぢをさめ出でゝ
先づほゝゑみてうらわかき
とはに雲らぬ朝日子の
遠き旅路を歌ふかな。

磯山影の夏木立
若き命の露見えて
やがて短き力とは
悟れる身にもうれしくて。

夕日ゝゞよふより〳〵は
冲に漁りは歌をきゝ
夕月西にたゆたへは
苔の巖居に床を置く。

磯に落ち合ふさゞら川
深山の奥の花の井は
ふゝのき薫を身にしめて
若き夢ぢにさまよへば。

世の歌人(うたびと)をさまさんと
茲にしらべは地に落ちて
通ふや波は音に出でゝ
汀の花に戀ひ泣きぬ。

ア、面白ろき此の影に
幾その年や重ねけん
されども波は一たびも
花の裳裾にふれざりき。

深き思ひを打込めつ
湧きて寄せくる新潮や
浦のみるめにかにはぢて
心くだきて返るらん。

月はおぼろの或る夕べ
冲ぢ遙けき島影に
花は一つの星を見き。

思へばわはれ幾千年
名もなき空の星くづよ
宵やみ深く迷ひては
世のうき戀をなきし哉。

泣きしや熱き一しづく
地には紫蘭の露とちり
海の眞珠と凝りては
やがて猛りて岩を嚙み
しぶく水泡に花は消え
星驚いて海に落ち
なほも寄せ來る波あはれ〳〵。

深きや底の戀なりき。

熱情もてもるなな〳〵に
中空高く歌きけば
光をなげし星の夢
花の袂に通ふあり。

思ひは繁げき花の露
煥めく星を身にしめて
盡きぬ光に打出でゝ
紅きつぼみは戀に燃ゆ。

夕なぎ赤き雲ちりて
眺めさびしきうなばらや
波は如何にこの思ひけん
渦潮高く濁り來て。

和歌

春晝閑　紫影

萱れ根は長き日飽かず箔打の箔うつ音す梅咲ける家
宇宙の壯觀は電光雷鳴
煩惱の器焚きてむちはやぶる雷は神今われを擊て
妻なる人のいたつきける頃
乳根の母病して子は痩せぬ其子の父は翁さびにき
新婚の友に戯る
千代八千代うけて祝はむ玉椿白玉椿玉の如き人
よき人のよしとよく見て呼ばひにしよき人よく見むよし醉へりとも

濱風にうちしはぶるひ姉といもと茸かる女の子鶴脛にして　三諸
猿まろの森やたのまむ風たちて時雨ふりきぬ笠舞ひ里
風あれて夕雲まよう冬の野を柩なかくりゆくはたが妻

今日もまたつとめは終へぬ日はくれぬ我なぐさめよ馴れし歌卷
雪きえぬ青空見えぬ鳥啼きぬ梅あゝ國の春をいかにせむ
春たちぬ馬を太庚嶺のみねにたてゝ東海を望まむと思ふ心あり
子なくして餓ゑたるもあふん親なくてこゞゑたるもあらんあはれ冬の夜

荒山越

雪とると岩根さぐゝむ勇士あり荒山越にゆきあづむ子ら
跳りこえてたゞに歸らむゆけど〳〵ゆくてにつゞく魏のむら山
むま酒に事しかゝずゞ一年はすみても見ばや春の山里

櫻の歌　愛花

夜もすがら降りつる雨の朝やみて朝日さすなり楊貴妃櫻
今日來んと云ひつる友の影も見えず夕日さびしく櫻ちるなり
月琴は背に負ふさまれ輕げにて花の下もく男と女と
人の家の櫻に歌を思ひ居れば童部きたりこあたへといふ
峠超ゑて足疲れけり谷川れ水のむ岸れ山櫻のな

春日雜詠　定郎

野若草　昨日今日ふる春雨にもえいでゝむら〳〵青き野邊の若草
春人事　花はゑみ柳はあひく春の日は人の心ものどけかりけり
月前花下難去　櫻花咲くを見んとて朧月いでゝいよゝ立ち去るもうき

俳句

木がくれや茶摘女の小手まねく　紫影
わづらうて出代る老れ涙かな
中島の松に交りてさくらふ哉
卷向の檜原かすみて揚雲雀
飯蛸や入道と名乘るべく小さうり
花散るや朱をさしすてし熊野の卷
嫁ふんとして家を出です初櫻
古社ひねもす椿おちつ椿たつ
野風呂ぬく溝川の月や蛙なく
五箇山の一溪肥筑を境す
筑前の椿たち肥前の櫻散りうゝる

春季雜詠

牧場廣き豚のうなりやわたゝのき　愛花

小蒸氣の笛の音湖に霞みけり

根穀の垣や芽を吹く落の臺

午時の鐘霞みけり女人坂

雨に籠り嬉しき味や木芽漬

種蒔くや石にのせたく紙袋

種蒔いて小雨となりぬ晝下り　無哉

俳諧の話はすんで木芽漬

酒もあり奈良の泊りや木芽漬　吳鐵

珍しき種を蒔きけり裏畑

大膳の鼻うごめかし小鮎哉　松實

秋千にうね〳〵低〳〵春の山

舊道の宿屋をやめて蠶飼哉　九龍

高欄に虹見る朝のあたゝらき　夢人

春風や河原をかける放し馬

陽炎に石壇のぼる草鞋うあ

寺朧阿彌陀藥師戀の中　光夢

峯入の男十津川訛かな

花守の髑髏を叩き謠ける

煎餅の音うさだうに春の店

漢文

送小山春卿之東京序

村上函峰

士君子之居レ官成レ名者。不レ兼二備才識學三者一。則不可也。何則非レ才不レ能二以當レ難解レ紛。非レ識不レ能二以察レ機斷レ事。非レ學不レ能三以辨二二者之當否一。而才與レ識出二於天稟一。學成二於人爲一。余交游中。獨小山君春卿。可レ謂レ兼レ之矣。君天性才識。超二越乎等輩一。而佐以二學術之博一。莫レ不二往而成レ名焉。況於二實驗之學職一乎。明治十六年六月。君由二文部屬一。轉二任長崎縣一。爲二學務課長一。尋補二師範學校長一。學務課長仍レ舊。其初就レ任也。縣民不レ知二教學之可レ重。雖レ有二學校之設一。率多有レ名而無レ實。君銳意從事。百廢具舉。於レ是闔縣教學。翕然改レ觀。以至二今日之盛一。蓋初小學財用不レ足。施行極艱。乃編二規約一。募二集之一。得二十有四萬金一。既而制二小學教授法一。且擴二張中學一。釐二革商業學一。創二立獸醫學一。特若二師範學一。則展二拓校規一。整二理教務一。循々有レ序。遂卜二地爽塏一。改二築之一。規製宏整。嚴々翼々。頗極二壯麗一。又以二餘力一。創二教育會一。每月一次。刊二行雜誌一。議論的確。人奉爲二圭臬一。君在職蓋七年矣。贊二翼上司一。規畫措置。多二可レ書者一。不レ可二勝數一。余獨稱二其大者一。顧在二他人一。極爲二難事一。君則綽々然有二餘裕一矣。余往年來就二學職一。日承二其指授一。情分之深。魚水不レ啻。今茲十月。君轉二任高等熊本中學校教授一。余竊

謂君之遷也。榮則榮矣。然以君之才識學。任不出地方。意未以爲足。既而赴任之後。未幾果轉任東京職工學校教頭。余聞而欣然曰。君今而得以大展其驥足矣。竊聞政府近日頒新學令。果然小大之學。益可以振興。特若奬勵職工。則今日之急務也。周禮考工記曰。國有六職。百工與居一焉。夫百工之盛衰。關人民生業之盛衰。人民生業之盛衰。關國家之盛衰。是所以有職工學校之設也。然而雖創立之有日。校規未振。今也欲大擴張其規模。以督化生徒。君乃膺其教頭之選。以君之才識學。從事於此。吾知不負其任也。會君將之東京。過長崎。余迎見之旅亭。君爲求一言。誼固不容默。而君之行速。乃於別後。書以遺之。

鄉原德之賊也

明　石華陵

聖人之惡邪也。非徒惡其邪也。惡其能似正也。蓋邪之於正。不能不並行于天地之間也。並行而不相害。聖人之道如是而已。聖人意謂。人各有所見。其見雖偏。其害雖多。唯其身也。而不害我之正。是可。人各有所說。其說雖異。其失雖多。唯其身也。而不亂我之眞。是可。聖人未嘗攻異端也。其於鄉原則不然。曰過我門。而不入我室。我不憾者。其惟鄉原乎。鄉原德之賊也。一夫其所以惡之者。非惡其鄉原也。惡其賊德也。若鄉原其人。非必有識也。同乎流俗。合乎汙世。唯曰善是可也。而衆皆以悅焉。其爲人非有力也。諛于高貴。媚于下賤。唯曰好是可也。而自以爲是焉。一鄉之人。見其如是也。從而稱之曰。是原人也。從而稱之曰。是原人也。無所往而不爲原人。衆皆靡然從之。一嗚呼異端之於正。其害易知。故聖人不必致焉。鄉原之於德。其弊難辨。故人常惑焉。宜矣聖人深惡而痛絕之也。

高木習齋評。唐人韻致。眞動人目。

加藤益堂評。正邪人能辨之。然正邪之相似。難能辨。所謂似而非者是耳。余請據孔聖之語而辨之。夫天下事物。有正有邪。而邪每以勝正。如色以朱爲正。自紫色一出。其艶冶足以眩目。而朱反爲所奪。是故惡紫之能奪朱也。樂以雅爲正。自鄭聲一出。其淫哇足以悅耳。雅樂反爲所亂。是故惡鄭聲之能亂雅樂也。至若事理之是非。人品之賢否。未有定論。乃有一等利口之人。巧辨惑亂。能使人主乖張。而邦家以之覆矣。是故惡利口之覆邦家者。致卿此篇立論。實基于斯矣。則豈攻正邪相害之眞髓者耶。抑天地之間。正邪並行勢也。能制其勢者。聖賢之事也。致卿其聖賢之徒歟。

加藤櫻老評。識見雄大。筆力矯健。余竊謂行文之體裁。酷似昌黎。而議論之精確。遠勝昌黎。

木原老谷評。洞察眞理之見。稗益世教之論。余讀畢覺胸中快然。

吉津佐藤兩君墓表

同

慷慨激烈之士之處國難。一意出于憂國之至誠。不顧時之可否。而忠良亦以爲亂賊者有焉。亂賊亦以爲忠良者有焉。人事之變。豈有窮極乎哉。余於吉津佐藤兩君。深有哀焉。（村山冥々云。慷慨二字。全屬眼目。又云。冒頭數句。爲下段爲兩君雪寃之地。筆力矯然。識亦充透。）吉津君。名惟德。字行夫。稱何言。父曰惟篤。母大久保氏。少時爲同性伯父富雄義子。襲其後。佐藤君。名誠義。字達卿。稱下學。吉津君弟。弱冠出冒今姓。兩君夙負慷慨之

氣。與四方激烈之士。交接來往。常以國勢之日衰爲憂。明治丁丑之春。方薩人擧兵。兩君相共奮曰。吾輩平生慷慨之氣。鬱積于胸間。未嘗能一日漏之。今之時乃可以發矣。遂募集同志五十餘人。編爲一隊。應薩兵。與官軍戰。退保御船。時官軍勢大振。圍我兵甚急。彈丸雨注。兩君冒其間奮鬪。終共不起。實是歲夏四月二十日也。吉津君時年二十有八。佐藤君二十有五。越數月弟國華收兩君之屍。合葬於飽田郡月見岳之先壠。浮屠追諡吉津君。曰堅立院正譽不退居士。佐藤君。曰正覺院音譽大道居士。非溢美也。嗚虖兩君不顧時之可否。一敗而死。是亦人事之變。其眞可哀哉。雖然若兩君獨憂國家之憂。而不憂一身之憂。其悲壯慷慨。雖古烈士。其何以加之哉。又云。回顧起手。論得沈着痛快。兩君必首肯于地下。國華亦慷慨之士。從兩君行軍生歸。而慨兩兄慷慨呑志而死。欲略序其事以表之。來徵文于余。余於國華。有舊誼不可辭者焉。因爲叙其概略如此。有井進齋云。插入國華云々。句線索極靈。

村山冥々評。叙得悲壯。論得痛快。其意匠慘憺之處。酷肖魏氷叙。

有井進齋評。悱惻纏綿之氣。溢於言外。自韓子祭田橫文脫化來。

加藤櫻老評。一氣浩々。發而不盡。而其間着許多婉曲筆。文情不迫。以余觀之。是自昌黎伯夷頌來。

木原老谷評。若此種題。是難容易着筆。容易着筆。有大失體裁者。今明兄沆々着筆。諄々論辯。辯得痛快。論得無復遺憾。死者可以瞑矣。

馬蹄硯銘

竹溪孚

馬蹄硯大和穴蟲之所產也。頃者大森吉秋子。得其一硯。鍾愛不措。囑余銘。傳云在昔聖德太子。出遊駐馬於此地。自是所產之石。皆有馬蹄形云。其言妄誕雖不足信。蓋天下奇品也。去秋子篤學好古之士。必非玩物喪志者也。銘曰

不切不琢。硯形自成。　色如洮石。　質似玉瑛。　華墨之弟。
卷筆之兄華墨卷筆共產於南都　塤篪相和。　永侍書案。

漢詩

書感　梅塢逸人

燕趙曾聞古意深　少年結客箇中尋　醉來屢擊衛離筑　窮後誰分鮑叔金
謾首功名爲棄物　側身天地動狂吟　始知屠狗論文好　不是悠々行路心」

春曉

紅梅帶紅旭　鶯坐枝上歌　美人方睡起　影映碧窓紗　啓窓驚啼鳥　閉窓不看花
碧窓紅旭曉　奈此梅鶯何

初夏

夏淺饑蚊未　南軒茗可煎　蛙聲楊柳暮　雲色杜鵑天　象景歸閑地　祇園謝俗緣
三更明月出　窓竹影鮮研

代人題某氏像

自愧一頑夫　生成北海隅　會欲紹箕裘　負笈遊東都　平生勤王志　奮激欲損軀
籌策多齟齬　抱痾貌已癯　西趨又東走　締交皆頑儒　施葯救貧者　著書闢邪途
常鄙附羶蟻　尤惡假威狐　或捫王猛蝨　或泣下和珠　窮達同物換　死生與道俱
只期忠報國　不負武穆徒　相形爾爲汝　心志我知吾

雜報

再ひ青年歌文會を戒む

一度其成立するや余輩双手を擧げて之を迎へ大に之を奬推する所ありたり、其抱負の如何にも大にして其文學に忠實なるを知りたればなり然れども何ぞ圖らん呱々の聲を擧げて此に半歲なふざるに一縷の命脈は早くも絶ゆるに垂んとし餘命旦夕に迫る、前に余輩の之を見るや憂慮措く能はず、誠に警戒する所ありたりしなり然に蛙面の灌水に異らず會員諸士は秋毫も刪新奮勵するところなく舊によりて舊の如くメンバーは會數を重ぬるに從つて愈減少し、やゝ其頭角を現はしたりし花樵、花の舍去りて今や神聖なる本校青年歌文會も市中の俗物ら閑文字を弄し骨董品を玩味する遊戲會となり了せり、蓋し歌文會は三代集を繰りのへし新古今時代の人間が口眞似を演習するまとゐならば卽止む、苟且も明治の聖代に生存し、東西の思潮を融合し、此が恩澤に浴し、和歌を以て國文學の一方に堂々割據せしめて遜色なからしめんとする青年が碌々として唯古人の糟粕に嚙り付き徒に此が口吻をまねばんとは餘に愚鈍の極ならずや、奚爲ぞ天外の奇想を齎らし、清新の聲調を抽てゝ暗黑なる和歌界に一新光明を赫耀たらしめざる、然れども余輩は徒に梯子なくして一躍階上に昇れといふものにあらず、天空飛雲を摑むの幻術を示せといふものにあらず、其聲調法則等所謂形式に關してはよろしく先輩の指導を仰ぎ、古人の佳什玉咏に接して窮親しく研究して可なりといへども自試むるにあたりて剽竊摸擬の其內容に及ぼすに至りて余輩は終に默止すると能はず其和歌に對して賊子たると共に實に明治文學の靈毒として大に排除殄滅すべきなり、げにや詩神はかゝる不純不潔の物に祝福を垂れ玉はずかゝるものゝ現世に存在を許されざるや宜なり歌文會夫果して詩神れ滿足と擁護を得るや否や、

書籍寄附

憂鬱と煩悶は終に白刃一閃の露と化せしめたる故大津胖君も人の噂の七十五日と消え去りて杳然又何の消息も聞えず、犀河南堤の墓標は徒に新苔に埋もれんとする時、倏忽再び氏を追懷し頻に襟をうるほさしむるあり、曰く故大津胖君の名をして永く本校に忘られざらしめんとして其の遺書幷に有志同窓が醵金よりなる數部の書冊を本校書庫に寄せたる事是れなり、おもふに氏が抱懷を他日に期せし所實に大なりしに抱らず天の假したる命數は餘りに僅少なりしなり、

余輩其書を繙く毎に悵として咽ぶもの幾回、奉直ある氏の顔容を眼前に浮べずんばあらざるなり、此に其書名を列記し以て永く氏が名を憶持せんと欲すといふ、

遺書の分

一経濟通論　持地六三郎
一日本新辭林
一ゼルマン、コース、
一和譯英辭彙

寄附の分

一心理學講義　牧瀬五一郎
一倫理學　元良勇二郎
一エミール抄　山口小太郎譯
一明治法制史　清浦奎吾
一おあし草　細川潤二郎
一獨和字彙　小栗栖香平　福見尚賢譯
一フリユウゲル獨英字彙
一ホツマン文法字典
一最近支那史　西村貞一　河野通之
一古戰場

校友會委員推選者如左

委員候補者

十全會講話部
醫四　中島擴三
醫三　山崎芳太郎
醫二　片岡正
醫一　松田研吉
藥三　駒屋禮二

十全會雜誌部
醫四　河野勇
醫四　濱口廣海
醫三　岡島敬治
醫三　鳥飼尹重
醫二　丸山六郎
醫一　須貝璋太郎
藥三　駒屋禮二

北辰會講話部
文二　西川巖
二二甲　秋元繁松
二二乙　野村尚三
三二　舟木重次郎
二一甲　入江繁太郎
二一乙　岡村金藏

北辰會演說討論部
法二　高見之通
法二　藤田俊一郎
一一乙　阪口重一
柔道部
醫三　湯本四郎右衛門

北辰會語學部
文二　阿部維巖
文二　原義朝
一一　轉法輪戒淨
法二　松井萬綠
三二　藤田敏彥
三一　上野道故
文二　渡邊良法
醫二　土田久三郎
法二　伊佐壽
法二　牛塚虎太郎
三二　植村富五郎
三二　山崎駿二
三二　武田榮太郎
ベースボール部
醫二　井上隼雄
二一　澤亮
一一甲　小林清次郎
一一乙　秋月致
ロンテニス部
醫二　尾倉一英
法一　安達欽靖
二一丙　臼井邦吉
三二　島津精之助
フートボール部
醫二　福岡喜洋

北辰會雜誌部
文二　森卷吉
一一甲　小島誠造
二一甲　河原繁
三一甲　上野忠愛
醫二　辻村耕夫
藥一　竹俣源太郎
法二　松井萬綠
醫二　早瀨三求
二二　鳥海他郎
三二　有馬章三郎
理二　石田收藏
一一甲　橋本勳
醫二　森岡惣太郎

劍術部
醫三　長谷川葛
醫一　永江直之
法二　林慶太郎
二二乙　河合文吉
一一乙　大橋貞勝

北辰會各部小會記事

國語會　新古今の合評と德川文學史とは各週交〻之を開き合評の取り〳〵にておかーきは云ふまでもなく武笠先生の熱心なる文學史講演は着々歩を進めて既に小說の時期に及べり嘗て合評

會の餘暇藤井先生起て三馬の略傳をものし其性格の批評に及びしも全く其終を結ぶと能はず他日の講演を約して下壇せり

漢文會　第三例會に於て宮川教授閑かに周禮に就きて惇々説き起して檢考索引三時間に渡れり爲めに二三有志の口演は之を他日に讓るとせり

獨逸語學會　二月二十七日例會を開く當日登壇の諸氏は

一部一笠井仁八　一部一高井竹次郎
一部一安達欽清　三部二吉光寺錫
三部二加茂貫一郎　同佐原政義
同池上四郎　同森木哲馬
一部二松扉得悟　三部三圓山靈鎧
同大道庄藏　一部三吉田堅治
教授中目覺　同E. Junker.

三月十日例會を開く當日登壇の諸氏は

一部一山岸哲夫　同櫻井小市
三部二大河内常一　島津精之助
同櫻林格造　三部三植村卯三郎
高野直吉　一部三芝田徹心
教授E. Junker.

英語學會　各月一會必ず例會を開き登壇者十數名を下ふず氣焔大ひに昂れり余は思ふ各部小會中英獨語學會最も其意氣の盛なるを視る國語會は着實なる研鑽に勉むるあるが如し

講話部第三回例會　例に依りて二月十日本校化學教室に於て開かれたり、當日は戸田今井兩教授の講話あり、戸田先生は先つ『法律と道德との關係』といへる題にて講せらる、先生元と社會學を修められ、法律學を研究せふるゝ士、前記れ講題を撰ばれし豈偶然あらんや、

其大要に曰く、凡そ人類が社會を組織するに當りて當然守るべき規則を名づけて法と云ふ、此の点に於て之を見るに法律も道德も共に此の一種に外ならざるあり、唯此の法を守る上に於て差異を生ずるのみ、卽ち之を守ると否とを以て單に個人れ良心と社會の制裁とに委するものを道德となし、更に進みて社會全般の意思を代表する政府の力を以て勵行するものを法律となす、是を以て昨日迄で道德として存在せし法も今日進んで法律と認めらるゝ事あり、近時發布せふれんとする未成年者喫咽禁示令の如き是なり、又嘗て法律として存在せし法れ今日却て道德の部類に入りしもの往々是あり、宗教に關する法令に於て殊に然るを見る、斯の如く道德と法律とは其元則に於て一あり、決して彼の僻論者の所謂口に權利義務を説き法律を云々する人々は到底道德家たる資格なしと云ふが如きは實に皮相の見たるに過ぎざるあり、又彼の法律なるものは決して道德を外にして、社會の意思を外にして成立するものに非ふざるなり、例令暴君又は苛虐の主ありて、民意に反して社會が求むる法以外に於て法律を制定せんとするも、必ずや民の反抗を招き、革命を誘起し、遂に此を癈止せずんば止まざるあり。以上の如きを以て眞正の法律あるものは、毫も道德と矛盾せず、社會が此れを最も必要と認め其の意思を代表する政府をして强制的に行はしむる所の道德に外ならざるあり。と先生獨得の辨を以て縱横に説明せられたり。

次に今井教授『石炭瓦斯に就き』との講題にて講話せらる、先づ石炭を熱すれば燃燒すべきガスを發生する事の初めて發見せふれしより、其光料として用ゐらるゝに至りし迄の歷史より説き起され、次に現時一般に行はるゝ所の此のガスを制する裝置を一々精細ある圖面により示さる、然る後石炭よりガスを得ると同時に生ずる

副産物、即ちアムモニア水、タール、コークス、等を一々標品を示して其應用を說られ、又近時に至り以前其處置に苦しみしタールの應用の研究非常に進歩し、アニリン色素、石炭酸、其他青藍、アリザリン等の須要なる色素、及び各種の貴重なる藥品等は皆此の物より製造する事を述べられ、アニリン色素の標品を示さる、夫より兼て製しありたる多量の石炭ガスにて種々の實驗あり火炎の構造、各種實用に供せらるゝ燈類、其他燃燒ガスの主制成分たるIlluminant並びにDiluentに付き詳細に說明せらる、就中最も目を引きしは、燃燒とは全く比較的れ現象にして、二種氣体の接觸する部分にて起る者にして、石炭ガス空氣中に燃ゆる事を得れば、從ひて空氣は又石炭ガス中に於て燃ゆる事を得るを證する實驗なりき、最後に、近時電氣燈の發達により、石炭ガスは唯燃料として用ゐらるゝのみなるも、同ガスの一成分たるアセチリンを容易に炭化カルミウムより製し得るに至りしを以て、將來照光上に一新時期を開くべきを論せられ、アセチリン燈を点じ、爛々たる光輝の内に全く該講話を終へられたり、聽衆例によりて化學室に充滿す、

寒稽古終了

城畔の曉鴉未だ瞑々の聲を放たざるに雷鳴叱咤の響は驀雲を破りて寒颯に泄れ來るあり不識之れ何等の音ぞ四民太平を謳ふて擧世擁爐の暖を貪るとき壯士劍を拭うて月下心膽を寒氷に照す者不識之れ孰れの客ぞ吁之れ寒稽古の壯況に非ずや三旬の時日短しとせず極冬の亟寒堪え易からず而るも壯士はひらには血痕なまぐさき稽古衣を負ひ右手には伊都れ竹刀を取り佩はして積雪脛を沒するところは猛猪なも蹈あづみくるはら〻かして凄風に面を曝らしつゝ先を爭ふて無聲堂に入るもの之れ我校幾多の快男子おふずや其勢の盛なる元龍の天に冲するが如く其氣の當るべかふざる淅瀝の聲江河を折くが如し特に本年は委員諸士の周旋盡力により一は以て其効を旌はさんが爲め一は以て稽古奬勵の爲め寒稽古皆勤者に對して普くメダルを附與するとなれりさるのあらぬか本年皆勤者其數の多きこと前年に倍せる亦人の疑を惹くに足るべし嗚呼香を追ふて走る犬と香を追ふ者と共に何等のけしめおきも軟弱蒲柳の輩聲嘆れ肉落ち日夜病蓐に呻吟すると孰れぞや若し夫れ皆勤者にしてメダルを獲んとするが爲めにして練磨修養の意なくんば吾は壯者の爲めに紅涙を流して其非を鳴らすに躊躇せざるべし然れども當事者の意中毫も斯底の考あるにあふず唯只斯道奬勵の爲めにせしや明なれば已後斯道に志す者能く介心して深く將來を誡めて可なり

次に柔道部有効章受領者の芳名を記すちなみに云ふ此有効章ミダルは斯道に勉勵して能く後進を誘掖し而かも學事に疎かふざるものに限り授與せらるゝもの也

追贈　生野團六　芝田徹心　村田讓　佐々木久二

柔道部皆勤者如左

伊佐壽　三橋篤敬　有馬章三郎
清水監藏　山崎駿二　村田讓
芝田徹心　土田久三郎　平倉保市
仲佐貞次郎　河原繁　奥山龜藏
高田重忠　小杉謹八　渡邊十治
宮井勇　清水秀夫　菅野平次郎
佐久間兼信　遠藤八千代　加茂貫一郎
佐伯良齋　廣部德三郎　秋元繁松
河合文吉　萩尾政次　關口通太郎
山岸哲夫　山田博愛　中村了
鳥飼尹重　市川靜　柏木敬介

陰山金四郎　藤田俊一郎　山崎嘉夫　駒井定哉　島誠郁　今井正親
關野長　橘三九　松田龜太郎　關口通太郎　遠藤八千代　小林茂樹
石原善友　森田作十郎　河野勇　宮本茂吉　小杉謹八　大西顯造
高澤辰之助　佐原政義　梶川藏重　松王數男　本儀正　村田重次
廣根市郎平　寺島良太郎　小川恂藏　鳥海他郎　飯塚忠男　久津木勝作
角田榮三　小幡擊雄　降幡積　石田收三　山崎嘉夫　加茂貫一郎
佐藤軒二　涯美溫　上野道故　畠彌三郎　華房義溫　上野道教
河島重平　本多忠之　井上隼雄　太田友一　坂井勝雄　森岡京次郎
田中秀夫　藤原敏夫　佐々木久二　古屋茂雄　田中貞彥　野口濛吉
植村卯三郎

計　六十名

擊劍部皆勤者如左

河合文吉　駒田定郎　松本德三
伊澤一亮　林慶太郎　丹治善藏
押原三吉　山崎駿二　中村讓
大橋貞勝　水谷重忠　稻葉逸好
內藤隆太郎　石原善友　鈴木美雄
佐竹時之助　高見之通　保坂正治
增田貞吉　須貝璋太郎　橋本新太郎
大藤幸人　小野定志　森公平

擊劍部昇級の諸君は

第三級へ　橋本新太郎　林慶太郎
大橋貞勝

第四級へ　伊澤一亮　長谷川葛
保坂正治　鳥海他郎　河合文吉
竹村榮太　丹治善藏　松本德三
駒田定郎　佐竹時之助　宮本茂吉
時澤貞義　吉田昌治　田中貞彥
永江直之　山崎駿二　桐山誠一
三橋篤敬　水谷重忠　小野定志
須貝璋太郎　飯塚忠男　本儀正
第五級へ　鳥飼尹重　外垣秀重　大藤幸人
尾崎齋　棚木三郎　高見之通
內藤隆太郎　浦井鏘次　植村卯三郎
久津木勝作　增田貞吉　松村魁
松王數男　藤田敏彥　藤田俊一郎
小杉謹八　遠藤八千代　安藤一二
齋藤久三　坂井勝雄　森公平
關口通太郎　鈴木辛熙　鈴木庸生
鈴木美雄

擊劍部大會記事

◎冱寒三旬既に去れり、此を日記帳に徵するに、其十の九は、雪に非らずんば卽ち雨なり、然れども人徒らに北國の天候、霪濕なるを咎むる勿れ、天の靈妙は、吾人の窺覦の外にあり、若し金城霪濕冱寒の氣を去らば、其の靈妙は、此を何處にか求めん、春花秋月は、徒らに彼等の蕩心を催し、夏炎は彼等が痲睡れ劑たり、此の間に養成せられて蓋世の英傑たらんと欲するは、鴆を食うて、死する無きを願ふ者と、何ぞ擇ばん、於茲、天は吾人に下すに、冱寒の季を以てせり、噫北國の冱寒、吾人、汝を憎まず、吾人は汝を迎ふるに吝ならず、朔風一たび過て、木葉悉く地に落ちたる時、樹木は天然の頭蓋を表せり、樹木神聖の美は、蓊鬱たる綠葉に非ずして、禿梢露出の枝に宿せり、彼れ巨杏の勇壯逞しき梢、能く天を衝くの嚴、大柳の細糸を垂れて、風に靡く情、苟も美的思想を有する者、誰れか望み見て、一種の感に打たれざらん、天鵞毛を散して、枯梢花を裝へり、而も其の花艶なふず、目此を見れば、墮弱なる五体、緊縮冷冱するの感あり、朦朧たる腦漿自ら活氣を生ず、かの笑める春花の心を蕩すると何れぞや、雪は地に布きて、眼界皓々たるの時、忽ち想ふ、へ

ンサーをカノッサーに凍せしめし雪、兩國の橋上、四十七士の節を壯にせし雪、アルプス嶽に那翁を苦めし雪、遂東の凛野に、皇軍の忠を飾りし雪、雪果して異あらずんば、今年亙寒三旬、吾人の氣を養ひし雪も、亦異なふざるべし、朔風も暴れば暴れよ、雨雪も降ふば降れ、身は輝寒を患ふるも、天の下せる修養の時期は、此を徒費す可からず、萬物は潛蟄、歳寒を慘むも、無窮の歴史を有する皓雪は、吾人此を捨てず、迎て此と無窮の過去を談ぜん。園の槇は雪折れに、我を驚かし、戸をたゝく友にまかひて、寢衣に外套を被りて、無聲堂に我を走らしめし汝、烏玉の闇の夜に、我を柵外に跪立せしめ、天より遠慮なしに我を蔽ひし汝、我が足駄を奪うて吾が足に接吻せし汝、曉月に一入の光を添へ、我をして思はず戰慄せしめし汝、汝靈あふば、千載の下必ず今日の壯舉を語れ、

倏風は輕く鵞毛を飛ばし、翩々たる皓雪、旭旗を掃ひ、瑞氣自ら浮で、國運の無疆を示し、鶴松上に鳴て、福祉れ長へなるを祝し、北陸の靈鎭は遠く半天に秀容をあふはし、寶達醫王、笑を啣で紀元の佳節を祝し、共に今日の壯舉を語らんとする者の如し、

巨杉森々たるの下、二旒の日章旗、飄颯風に飄れり、此れ無聲堂の吾人を歡迎するの狀にして、兼て今日の勇者をして凱戰門の思あらしむ、既に場内の配置は終り、委員諸氏は、一隅に低々相語れり、時は熟するも、人は未だ集らず、各々顏に云ふ可からざる不平の色あり、既にして時は十一時に近からんとするに、漸に三十餘人を算へたり、頼み少なき人心をたよりとして、何時までも待ちわぶることの、はかなければ、聽て武場の靜寂を破れんとせしも、肝心蟹目の今日の勇士すら、未だ面影を、あらはさず、辛くして、武場に顯れたる勇士は、

○第一回

小手、面、（山田　博愛　牛塚虎太郎）

今日れ舞臺は二氏に依て開られたり、牛塚氏が昨年も先登の名を博し、今年再び衆に先ドて劍を取るれ心、果して如何、技に於て或は昨年に劣るれ譏を招くなきう、將た、山田氏れ快活なる太刀筋は、牛塚氏の敵に非ざるの、言ふ勿れ、勝敗は時の運ありと、嘆つ勿れ、我は常に逆境に立つと、熱血なきれ劍は以て他を制する能ざるは明あり、忽ち劍光は閃きぬ、迅雷は耳を蔽ふに暇あらず、況んや此を受け流し、機を制することの難きをや、山田氏、既に勝勢を得たり、之に向ふ必ず隙を擊つの心あかる可からず、然るを常に防守に汲々とし、奔走に疲れて、聽て第二の手劍を受け、今日の勝利は、立派に山田氏れ手に歸したり、

○第二回の勇者として演場に上りしは、

引分（大矢善太郎　月原　秀範）

綾羅の袖を翻へすに非ふず、嬌艶魂を奪ふにも非らずして、搔痒の嘆を漏らさしめし者は何故ぞ、蓋し、其の劍、中空に蹣跚として舞扇れ翩るが如く、足を擧げて擊たんとするあり、宛然細腰衣に勝へざるの美姫、立ちて舞ふが如し、只惜むらくは、此に和するに管絃嚠喨の音を欠き、觀者の徒ふに勇膽雄節を高しとし、嫻雅美妙れ眞理を解せざりしことを、二氏の心盡しも水泡と消え、時は愈長うして無聲無爲の間に終れり、

○第三回

面、胴、（太田　友一　上野　道敎）

太田氏が切り込みたる太刀は、能く敵の備へなきを擊てり、上野氏の諧謔は、未だ敵の心を亂すに足らず、東奔西走、僅に敵を疲勞せしむる

に足るも、自ら動きて敵之に從ふ、勞多くして功少し、手段ある敵に當るに、自勞の策を以てするは、自滅の策を講ずるに等し、忽ち第二の太刀は面に向て打ち下され、見事に勝利は太田氏の有となれり、

○第四回

小手、胴、（野口　濠吉　飯塚　忠夫）

兩雄陣頭に相搏し、何れか雄、何れの劣たるは、未だ知るに由なのりしも、飯塚氏が、めつた薙に薙き立てたる劍は、僥倖にも、野口氏の胴を斷てり、野口氏のひるむ氣色を見て取りし飯塚氏は、透さず、小手に切りつけ、勝は飯塚氏の有、

○第五回

面、面、（今井　正親　佐原　政義）

兩者の劍法能く相類し、其れ太刀筋、何れも柔弱れ嫌ひあり、而も懸聲なく、眞に無聲の中に勝は佐原氏の手に落ちたり、

○第六回

引分（村田　重次　石井　二郎）

演武場、尙ほ狹ましと、馳驅喧囂、擾々たるのみにて、得る所は一もなし、

○第七回

面、胴、（古屋　茂雄　河島　重平）

雲つくばかりの大丈夫が、場に上りてれ、のけひきは、如何に、はでぶ〳〵き者なるうと、觀衆目を睜り霎時の運命を氣づかひ居り〳〵に、古屋氏が呵々と笑ひて、車切の秘術を竭す手煉の太刀風に、向ふ敵もなく、眞額梨割と打ちおろす刃に、逆ふ者もなく、勝敗は定まれり、

○第八回

小手、小手、（清水　秀夫　外垣　秀重）

清水氏が焦慮苦心に引換へて、外垣氏ゲ、にくき迄に落ちつきて、連呼小手々々と叫びしに、我流を以て打勝たんと勉めし清水氏も、見事に敗北、

○第九回

面、小手、（塙　茂樹　芝田　徹心）

往年の白虎隊の氣慨を顯はし、凛然として、陣頭に赴きたる芝田氏、嚮日團右衛門十八世の孫として知られたる、塙氏どの立合ひは、此れまで沈淪せる道場をして、稍々活氣を帶びしめ、奔鬪奮擊、生死二つに三界流轉し、追蒐け追詰めて、縱横無礙に戰ひ、閃く太刀に先づ小手を取り、敵の打下す太刀を遁れて、面を打ちたるけなげさに、喝采は四方に起りたり、

○續て、技場にあらはれたる勇士は、

面、胴、（笠井　仁八　奥山）

軀幹の上より云へば、好敵手にして、觀象をして一見其の何れの優、何れの劣たるを知り難ふし、一度竹刀を交るに當り、体當りと云ふ迄に至らざるに、笠井氏は忽然地に倒る、奥山氏、當に機を見て成すべき時なるに、只憮然、敵の立つを待つは頗る怪、笠井氏立ちて亂打數刻、奥山氏の太刀は、小手と云ひて胴に當り、面を打ちて勝を取れり、兩者其の機を見るに疎き、劍法の妙を失せるも亦甚哉、

○第十一回

小手、小手、（高田　範國　渡邊　十治）

○第十二回

逆胴、胴、（遠藤八千代　飯沼九十郎）

紅顏の青年、太刀を青眼に搆へ、御面御胴と紅唇漏る聲は、頻伽の囀るが如く、穩に踏み出す足は、輕ろく短袴を蹴りて、自ら舞ふが如し、擧止既に處女の如しと雖ども、太刀の働きは三旬煉へたる腕の功見えて、何處に遺憾と小言をはさむ可き点は無かりしも、如何なるはずみに

やありけん、飯沼氏が薙ぎ立てたる逆胴に、遠藤武者は口おしき、敗戰の名を殘したり、

○第十三回　面、小手、胴、（小杉　謹八　須田嘉三郎）

莞爾たる小杉氏、劒を取るや否や、小手を制せられ、回復策として乘面を得、轍鮒の窮を救はれし心地して、息つぐ間に、隙を窺へる須田氏、御胴と切り込み、勝敗既に定り、小杉氏得意の愛嬌も、未だ演ぜられざりし爲め、觀衆は呆氣に取られし感ありき、

○第十四回　突き、面、（藤田俊一郎　駒井　定哉）

忌憚なく評すれば、技に於て伯仲たり、然れども駒井氏が先を制せし爲めの、藤田氏は勢、守戰に傾き、屢々機を失し、徒らに敵の名を成さしめたり、

○第十五回　面、面、（大藤　幸人　森　公平）

大なる火鉢、小き火箸とい、此の組合せを云ふべきか、然れども、二氏共に五級昇進者、定めし其の太刀遣ひも、妙あらんと、衆皆目を睜りけるが、大藤氏は、軀幹五尺に充たぬ森氏を、頭割にし、續て胴切にし、難なく勝は大藤氏の手に入れり、借問す、其の能同ドければ、小者果して大者に如かざるか、森氏憂ふる勿れ・大藤氏驕る勿れ、共に進退宜しきは以て　るに足る！、

○第十六回　引分（加茂貫一郎　大西　顯藏）

此の頃の夜長がにも、尚ほいぎたなくて寢惚たるにか、夢見る空の太刀遣ひ、寢言に口迸る懸聲に、非ふずんバ、日影待つ間の冬の蜂とも、馬琴ならば評するなふんも、吾人は如此言を以て二氏を評するを好まず、大西氏が赤胴つけての出立ちは、雄々しき例ふるに者もなし、まして加茂氏が御面と切りつけたるは、三略の傳、八陣の法、自ふ胸中に鬱積せりと云ひたげなれども、觀衆は此れも許すまじ、只ひもドく〳〵の太刀遣ひ、胃囊の空にならぬ樣、心して打て吾が敵よ、と云ひ合せたる如く、氣慨の滿ちぬは劒執るものゝ名折れにこそ、

○二君の長々しき立合ひは、休戰條約の訂結となり、阿容〳〵戰場を立去れり、夫れにしても許さぬは腹の虫、正午に幾何の間ぐあると、彼方此方の隅々に、時計を出して眼を瞪し、「やあ、十五分で十二時だ」、とさゝやく聲も一入と、耳朶に強く響くとき、三十分間休憩れ張札は、委員の手に依て掲げられ、轟々堂々、あくび、のびの間に、退散せし者は、百餘名と注せられたり、

來賓としては志波知縣に下村少佐、重野校長、せすふん牧師、等は其の重なる者ありき、

北條校友會長は、旗旒稍々亂るゝの頃、管城二人と從へて臨場し給ひ、功を錄し賞を行ひ以て士氣の沮喪を防ぎ、精悍肉搏、堅を被むり鋭を執て進むの士を勵し給ふ、

場内の裝置は、ぎやう〳〵しく、吾人ゞ禿筆を待たずして、之を響日の霞生子の筆に托せん、

○既にして時辰器一時を報ずる頃、觀衆、場に滿ち東南の隅、帷帳の内、稍々喧轟たり、是れ今後の勇者嘻々として相語り、平和の間、既に己れの氣を實して、以て敵の虛を待ち、畫策、轉た切なる所、發しては雷電奔激し、收りては雲霧凝結し、慘憺たる殺氣、皆此の内に潛む、忽ち顯はれたるは、

引分（石田　福松　高田　重忠）

高田氏が打つ太刀に、先を制せられドと焦燥ちて、愈哮り狂ひ、亂打する石田氏、終に一太刀も着くること能はずして引分け、

○第十八回　面、面、（大口　富次／東　爲作）

德義て武を講ド、澤足らずして威を以て壓すと云ふに非らざるに、兎角、東氏が戰鬪を避くるの勢を示したるは、敗を招きし所以か、

○第十九回　引分（土田久三郎／植村富五郎）

霹靂一聲、凛冽たる劍風砂を捲き、驀然として陰雲重疊し、沛然として猛雨到らんとするは、柔道を以て聞えたる二氏の立合ひあり、手捕十二手、亂捕十二手は、劍を執りては其の用を成さゞる故か、土田氏が「ナイン〳〵」とうあり出したるに、植村氏が、面を被りたるの、もどかしくてか、此をおほすも笑止あり、東奔西走、愈久うして勝敗もナイン〳〵、

○第二十回　胴、面、（有馬章三郎／坂井　勝雄）

柔道に於て四高にさる者ありと知られたる有馬氏、今や竹刀を手にして現れ來り、坂井氏と相對す、四周の眸子、皆茲に集れり、既にして合一合、有馬氏は先れ先に面を得て縱軀宜しきを得、槃刀胴を切り、坂井氏をして一刀の隙だになからしめたり、

○第二十一回　胴、小手、（濱口　廣海／胴、高見　之通）

体格に於て、技術に於て、好敵手、濱氏の寡言、高氏の贅言、組合はし得て妙、

○第二十二回　引分　小手、（關口通太郎／面、平岡　顯吉）

「あゝ」と大息を漏せし黑胴將軍平岡氏、初めに面を得しも、關口氏の後れ先に小手を制せられ、勝算は鶴の翁と齟齬ひぬ、

○第二十三回　面、胴、（松王　數男／森岡京次郎）

意氣凄しく猛進突擊せる森岡氏に、嬋蜥たる衣袂を飜し、名高き松王れ舞をだも御目にかくることの能はざりしは殘念、

○第二十四回　胴、胴、（廣根市郎平／本儀　正）面、

咄嗟蹶起したる本儀氏、面を制せし隙に、胴をば切り込まれ、あゝやと云ふ間に、第二の胴をば廣根氏の手に歸せり、

○賤ヶ岳に七勇士あり、無聲堂に七引分けありと云ひては何の趣味もなけれども、正成は七生を期して賊を滅さんことを誓ひたるに、吾が勇士が七回迄も續きて引分けとなりたるは、そも、勇士の力を盡さざりしか、將た委員諸氏の烱眼ら、いでや、此をものぜんに、

面、（田中　貞彦／小手、德田　虎雅）
面、（保坂　正治／小手、佐竹時之助）
胴、（國本　順作／胴、佐々木久二）
面、（小西　俊三／小林）
面、（駒田　定郎／面、增田　貞吉）
面、（小島　平岡　顯吉）
胴、（甘利　四郎／森谷　精一）

劍端相觸るゝや、直ちに叱咤怒號、猛進突擊、一つ俛せば、他は詘し、數合、漸くにして田中氏は德田氏の面を擊てり、德田氏一刀を受け〳〵

も、毫もひるむ氣色なく、小太刀つゞけざまに打ちて、天晴田中氏の小手を切り落し、互にしれぎをけづる數合、共に鋭氣盡きて引分けとなれり、

閑雅なる風彩は之を保坂氏に求め、柔婉なる擧止は之を佐竹氏に取るも、二氏共に權變術數を恣にせず、勁勇偉略もあらはさず、徒らに佐竹氏獨特の冗長に渡りて引分け、

黑胴將軍國本氏、乳臭の書生は呼びて「ちやぼ」と云ふ、膽勇にして不撓、之が敵手は柔道を以て鳴りたる佐々木氏、我は呼びて謙信と云はん、蓋し過ちて徒歩踵を引くを以てなり、活達にして英邁、盤錯に遇ふて挫けず、紛擾に處して亂れず、大喝すれば風躍り濤湧く、戰愈々久うして劒愈々冴え、英氣を集めたる一刀は、將に雌雄を決せんとせしに、忽ち休戰の命は下れり、默雷能く雲霧を生ずれども其の聲聞えず、只聞く、東方能く人を罵倒するの輩、口笛を奏し、寂漠を敗り、嘲笑相樂で兩氏の攻守の方、戰鬪の術に注意せず、蓋し、太刀條冴えざるが爲めなり、

小首傾け敵を揣摩せし駒田氏、足穩に踏み進み、短き太刀を捨身に搆へ、青眼に搆へたる增田氏と互に隙を窺ひしに、增田氏が打てうゝりし一太刀を、捨てはづすこと能はず、捨身の勢、水車を使ふに利あるにも係らず、得意の鉄州流の横面水車薙も行ふに遑あらず、あちらこちらに漂泊ひ居る勝利を獲るに至らずして又引分け、

（審勝負柳糸稿）

勝敗は終に決する能はざる者の、技、能はずんば術を以て勝り、術、能はずんば力を以て制せんと、意氣まさたる小島氏、驀然に打ちてのゝり、叫喚、敵の眞向を割りしも、相等しきの勢は兩敗せずんば兩存せんのみ、

代りて出でたる兵者は、そも、誰ぞ、武場に現はるゝの道、刀を以て互に相戲れしは、是れ狂言の序幕、一度び竹刀を採りて見ゆるや、接しては相擊ち、分れては相倒れ、來賓の前、會長の傍、匍匐して煩悶懊惱し、突然絶叫怒號し、飜然劍を携へて馳騁し、輕躁粗暴、諧謔諂諛、卑陋拙猥、宛然一對の幇間、愛を閨門に求め、陋使に諾々たる如し、人は呼て「倡優」と呼び、「馬脚」と叫び、罵詈譏笑し、如此輩出でゝは、斯道の穢、竹刀の名折れたるを浩嘆せり、輕忽なる擧動は之を久うして、引分の命は下り「倡優、馬脚」、再び相戲れて退けり、

○場内の空氣は此の輩に依りて汚されたり、尤も恐る可きはバチルスの漫延なり、之と撲滅する策が其の何たるかは知らざるも、時に十分間休憩の命は下り、此隅、彼隅、功名を談ずるあれば、時運の非なるを嘆つ者あり、あくびする者あれば、痰壺を捺する輩あり、此の時、既に觀衆は場内に溢れ、口をーげに、窓外に彳む者もありき、

來賓席に到りては、更に、中村少佐、天野師、警官軍人等を加へ、又空席を見ず

師範家として、柿田、吉見、都賀田、藤岡、廣瀨、諸先生忝く臨場せられ、親しく審判の勞を取り給ひしは、吾人の鳴謝して止まざる所なり、

暫くにして道場に現れたる二勇士は、

面、（師）手塚　佐吉
面、小手、（内藤隆太郎

流石は師範校の選手として知られたる手塚氏、青眼に搆へたる所、少しも隙もなし、況して御面と一太刀あびせかけたる勢は、内藤氏を挑撥するに足り、龍爭虎搏、火花を散らして立合ひたるに、戰場は愈々活氣を加へ、無我の稚童す

ら、「先生が勝ちたゝ笑うてやるのや」と、口〻りたり、噫手塚氏、此の天眞爛熳たる、稚兒の好意を受くるを欲せざるゝ、忽ち勢は變して防守となり、頻りに、小手面と制せられ、稚兒はあつ氣に取られて呆然たり、

○第三十三回　（一中）　太田　宇一　福岡　喜洋　胴、面、

木がらしに梧桐一葉ちりにけり（柳糸）

○第三十四回　（二中）　山本　孝貞　長谷川　葛　胴、

引分　面、

「こて〳〵やっけよ」との喧噪は彌次連の口より迸りぬ、此に勢を得たる山本氏、敗戰の有樣を變して互に對峙の容姿と迄は漕ぎつけしも、元と之れ鉛は鉛。如何に鍛へても露結び、霜凝るの劒とあゝぬはかあ〜、

○第三十五回　（一中）　河合　芳雄　吉田　昌次　面、小手、

吉田氏がこゝをせんぞと力め戰ひしも、鶉の嘴と齟齬ひ、見事に勝い河合氏は得物となりたり、されど田横が潔き志は死にし後にも慕はれけり、

○第三十六回　（二中）　田中　三彌　松本　德三　小手、小手、

「三彌〳〵がつしり突きましね」と、騷ぎのゝじる彌次連を後眞どせる田中氏、屢々突キを試みしも、弱は敗、强は勝の原理は覆へず能はず、がつ〜り小手を切り落されたる恥辱にや、頭だも擡げ得ず退場せり、

○異裝の武者は打て出たり、觀衆の視線は皆之れに集れり、背をも貫らんと突き出したる銃劍は咄嗟冤をはづされ、手近く切り込れたり、そも、此の立合ひを誰とかあす、

○第三十七回　（師）　脇坂　政平　七五三龜吉　面、面、銃鎗

七五三氏は今や端なくも草を打ちて蛇に驚き、脇坂氏を遠くること能はざりき、勢を見るに敏なる脇坂氏、何條、此れ機を逸すべき、肉搏急追し、敦圍きて切り立てたれば、七五三氏も成すに便なく、潔く勝利を敵に渡したるは、流石は未だ年若き、銃創を手にして、多年煉へたる劍道に對向ふ殊勝の心も現はれたり、

○第三十八回　（二中）　南　長藏　丹治　善藏　小手、面、突キ、

彌次連を眞とし、天狗を鎧とし、家傳れ竹刀を提げて、悠々現れたる南氏長藏君、敵の小男なるを侮りて、眞額見ゥけて打ち下〜したり、敵もさるもの、相手の鋭氣を避け、容易に犧牲と成る可くも見ねず、かんじんゥなめの咽をやくし、機に乘じて亂れ打ち、瑜伽成就れ快樂を得んと勉めしも、許さぬ体格に制せゝれ、彌次連の歡呼を高むる種とはありにけり、

○大と勢とは果して賴むに足る者ありせば、清正は秀吉に服すまゞ、歐州大陸は那翁の掌にまるめゝるまゞと、信を一片の竹刀に繼ぎて、出たる伊澤氏は、忽ち釣谷氏に面を制せられたり、騎虎の勢を得たる釣谷氏、身搆へ傲然たり、之を見たる伊澤氏、直ちに小手を制したり、彌次連は聲を勵して「鼻をゝれ、つぶせ、けたゝせ」と、罵詈の數を盡したるも、伊澤氏は益々沈着に、釣谷氏は愈々焦慮ち、奮鬪久うして、終局の一太刀は、伊澤氏の心を滿たせり、

○第三十九回　（一中）　釣谷次三郎　伊澤　一亮　面、小手、突キ、

○第四十回　（師）　中川　直亮　水谷　重忠　面、小手、

引分

猛獸を刺し、熊罷を獲るは獵夫の勇あり、龍戰虎爭、縱横無礙に戰うて恐るゝおきは、勇士の精悍なり、二氏の竹刀をとりて相見ゆるや、器

量骨相、能く伯仲して、而も精氣を盡し、劍道の忌避を行はざりしは、偏に觀衆の目を引けり、

○赤胴つけて見事につゞけ打ちを極めしは大藤氏、機を見て逸せざりしは青木氏、

○第四十一回　面、小手、（二中）　青木　齋　大藤　直哉

○第四十二回　小手、面、（師）　延命直二郎　駒田　定郎

○第四十三回　引分　上出　橋本新太郎

「蟷螂が斧を揭げて馬に向ふ」と、彼方の席より叫び出したり、實に上出氏は大兵、渾名は馬、橋本氏が殊に小男たるれ組合には適したる評よと、衆もあきれて聞き居たり、然し此の評、無限の罵詈の意を含みしは、例の口さがなき人の、必勝を信じて叫びしなりと知られたるに、案外にも、引分けとなりしは、評者に取りては殘念、

○第四十四回　小手、面、（二中）　松村　政馬　小野　定志

「政馬」御意を承りて功を奏し、怒號、喝采の中に退き、代て口笛の音に迎へられし勇士は、

○第四十五回　面、胴、（一中）　高橋爲二郎　須貝璋太郎

戰愈々長うして、高橋氏「のたつけよ」とれ命令を奉し、悠々凱戰せり、

○第四十六回　引分（一中）　竹中　州三　桐山　誠一

「ぞろす」なの〳〵強固にして、容易に屈す可くも見えねば、漂然捨身に搆へて敵を揣摩し、忽然青眼に搆へて、先を制せんとし、戰略の變化は愈々急にして、懸聲、益々忙はしく、右進左擊、角鬪之を久うして、休戰の命は下れり、

○蓮花は泥中に咲きて、人之を潔とし、杜丹は地上に開きて、人之を艶とあす、艶は外飾あり、潔は內實なり、內未ゞ充たずして、專ら外に勉むるは之れ虛あり、今劍を事として徒らにぶるることを勉め、潔を重ぜざるは、之れ尙ほ花の杜丹なり、其の內未だ富膽なふざる者あり、如此輩如何に能く劍を使ふも、自ら搔痒れ嘆を免れず、世多く此の流なるに、玆に一人の蓮花あり、渾名を「佛」と云ひ、姓は杉本氏、

○第四十七回　引分　小手、（二中）　杉本俊一郎　突き、　橋本新太郎

杉本氏、太刀を青眼に搆へ、濶達にして倨傲あらず、謙讓にして怯懦あらず、純潔にして無爲ならず、勇往直進、奮擊搏鬪、劍端迫へ、其の氣結て露となり、凝て霜となる、實に得難き劍士なりしが、遂に雌雄を決せずして終りしは、觀衆をして心足らぬ思を抱かしめたり、

○第四十八回　小手、小手、（師）　若狹　與吉　時澤　貞義

なゝめなる青眼かまへの太刀風に
豪なる敵もなびきけるかな

○中學の全盛!!、

○第四十九回　面、面、（二中）　石川　久七　河合　文吉

○第五十回　面、面、（一中）　毛利　勝男　鳥海　他郎

進て相擊ち、退て相睨し、慘悴たる光景既に演ぜられて、觀衆は氣自ら擧り、彌次連は「鼻をれ、うまいぞ」と叫び、或は拍手し、或は口笛し、場內は野人の集合所となり、無袴漢（サンスキロット）の狂暴せるが如く、叫喚場を壓し、慘悽、室に滿ち、名狀す可らざる騷擾は、之れ中學全盛時代あり、

○第五十一回　引分　面、（監）　富田　良吉　胴、　永江　直之

天は高けれども蹋まり、地は厚けれども蹐し、生死二つに追蒐け、追詰めて、礮と擊ち、剎と

切り、鋭氣は逆りて殺氣となり、沛然驟雨至るが如く、萬物寂然となり、凄然と變ぜんとする刹那、休戰の命は下れり、

○鋭氣は逆れり、刀は室を脱せり、雙眸は異彩を放てり、接しては胴を切り、離れては小手を取り、敬す可き威儀、侵す可からざる風彩は、毅然として拍手の間に顯はれたり、

○第五十二回　（衛）高橋　正則　小手、胴、河合　文吉

○第五十三回　小手、小手、（衛）太田　資純　小手、山崎　駿二

梅散りて櫻咲くまのいと寒し、（柳糸）

○第五十四回　（警）古屋與三二郎　面、小手、大橋　貞勝

鯉をどり山吹花の散りにけり、（柳糸）

○山は瘦々、野は蕭々、鬱々たる水の音、颯々たる松の聲、

○第五十五回　胴、面、（監）乾　芳久　面、三橋　篤敬

鬱勃磅礴して禁ずる能はざりし鋭氣、未だ發せずして、忽ち枯木に花咲き、寒林に老梟叫ばんとは、

○第五十六回　（警）中山外二郎　突き、面、押原　三吉

昭々として近く撃ち、隱々として遠く謀り、跼りて胴を撃ち、跨して小手を切り、虎穴龍潭に在りと雖ども、瑜伽成就の樂洋々として、彼れ青眼に搆ふれば我れは捨身となり、打ち來るをはづして、水車蓬を演ず、彼れ上段に搆ふれば、我れは獲身に搆へ、眞額見かけて打ち込む太刀をはづして突を演ず、當る可からざる鋭氣は賺して虚を打つ用にし、縱横無礙に敵に應じて戰ふは、流石に三界の傳、八陣の法を極めたる、武威の程もあらはれて、勝利は手煉の太刀風に、

靡く稻麻の如し、中山氏は愈々焦燥ちて、息吻あへず、眼を瞪し、鴻門の一舍に、范增が策成らずんば……的の、劍法を以て、蕎地に打てのゝりしも、知らずや、巨魚は池中に生ぜず、大鵬は燕雀の林に游ばざるを、

○さし登る月の顏、まだ夕晩れながら天つ乙女の娥眉と現したる如く、天の一方にうゝり、夕陽既に沒して、餘光尚ほ岫雲を照らし、映ずて五彩となり、雪は地に布きて四面皓々、人をして想はず仙化せしむる時、忽ち玄雲凍を生じ、殺氣空に漲り、

○第五十七回　引分　面、（警）松尾　金吾　面、林　慶太郎

艨艟海に浮び、旌旗陸を蔽ひ、三尺の刃結で解けず、眼光烱々、氣息切々、神昂り氣激するも、心清にして、念を三尺の竹刀にとめ、謀を方寸の胸裏に盡し、打ち出す太刀に隙あるに非らざるも、精悍相等しきされ勇は、終に雌雄を較する能はず、洋燈既に點せられて四隅を照し、歡聲湧き拍手席に滿つる間に、兩雄影を狹霧に隱せり、

○第五十七回の勝負は終りぬ、衆はどをと叫びぬ、此れぞ、今日の盛況の終を告げたる（濱萩）

投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし
一長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せぎ
一雜誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ぎ編輯委員まで御報道あるべし
一學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載致さゞるべし

明治三十三年七月廿八日印刷
明治三十三年七月三十日發行

編輯兼發行者　吉村政行　石川縣金澤市早道町五十六番地
印刷者　生沼倍男　同縣同市犬水町二番丁二十九番地
印刷所　商法施行前設立　活版合資會社　同縣同市高岡町三十四番地
發行所　第四高等學校校友會